

---

# 武神伝

メロンパン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武神伝

### 【Nコード】

N7770L

### 【作者名】

メロンパン

### 【あらすじ】

兄・煌輝との命を賭けた戦いの末、遂に「武神」へと辿り着いた龍騎。しかし、煌輝の想いを受け止めた龍騎はもう一度旅に出る。新たな戦いの果てに龍騎は何を想うのか！そして「武神」として一人の武芸者としてどこまでの「高み」に登れるのか！

武神伝第貳部「龍騎神話編」が幕を開ける――

## 番外篇 人物紹介（前書き）

今回は話の続きではなく、今までに登場した人物達の簡単な紹介をします。これから読む皆さんにも分かるように作るので、本編を読む前に一度見ると良いかと思います。

## 番外篇 人物紹介

### 第壹部 「武神激闘編」について

第壹部は神鳴流の大神 龍騎が、武神を目指して戦うというお話です。本当はここまでの道のりをメインにして、武神になって終わらすつもりでしたが色々な事情で無理やり武神戦に持って行ってしまいました。これからその途中途中の話を番外編で書く予定なのでそれもお楽しみに。今さらですが、ほとんどの人物は高校生、17、18歳ぐらいで考えています。たまに例外はいますが、龍騎や、村瀬などは、17歳ぐらいだと思っています。

### 第貳部の人物紹介

壹人目 おおがみ 大神 りゅうき 龍騎

ごぞんじ本編の主人公です。流派は神鳴流武器は刀しんめいりゅうです。刀の名前は「龍明」で一刀流で戦います。次は軽く技紹介です。

神鳴流奥義 壹の型 花瓣かべん

花瓣は刀の柄を相手の腹に押し込み、ひるんだところで刀を振り上げ、下ろす際に相手を袈裟斬りにする技です。使ったのは桐生戦と煌輝戦です。一番最初の技なのに出版が少ないですね。これからもう少し使ってあげようと思います

神鳴流奥義 貳の型 翠蓮すいれん

翠蓮は相手の前で一度刀を振り、刀を持ち替えて相手の前で今度は突きになるという、意外と複雑な技です。使ったのは花瓣と同じで桐生戦と煌輝戦です。出版が少ないのもう少し使いたいと思います。

神鳴流奥義 参の型 虚蝉うつせみ

虚蝉は相手の前で急加速し、横から後ろへ回り込んだあと空中に舞い空から相手を斬る大技で龍騎の得意技です。使ったのは八雲戦と煌輝戦と村瀬戦です。得意技なので一番出番が多いです。

神鳴流奥義 肆の型 麒麟きりん

麒麟は相手の攻撃を潜ってかわし、その勢いで相手の元まで急接近してそのまま斬る返し技です。使ったのは煌輝戦のみですが、窮地を救った大活躍の技です。

神鳴流奥義 極の型 虚陽きわめ うつかけ

虚陽は虚蝉の動きから、刀を投げて相手を倒す現段階の龍騎の最強の技です。正確に言うところの技は龍騎のオリジナルなので神鳴流奥義ではありませんが一応こういふふうになっています

神鳴流奥義 陰技 連撃いんぎ れんげき

連撃は一度大きく袈裟斬り（縦切り）下後に腕と手首をひねって肩甲骨をずらして刀の間合いを伸ばして敵を切り上げる技です。使ったのは丸山戦ですがこれから活躍すると思います。

神鳴流奥義 御の型 猛雷鎚ご たけいかずち

猛雷鎚は刀を敵の斜めから斬っている間に刀を握っている右手と左手を持ち替えて刀の軌道を変え、防御の無いところを斬ります。その動きが雷鎚のようなのでこの名前です。使ったのは小林戦です。

神鳴流奥義 碌の型 朱雀ろく すざく

朱雀は刀を握っていない手で刀を握っている手を弾くことで剣速を加速させ、武器を弾く技です。使ったのは安西戦と、佐藤戦です。

神鳴流奥義 七の型 八咫鏡やたのかがみ

八咫鏡は、刀を螺旋状に回転させ、刀の威力を上げ、敵の攻撃を弾くのを使う技です。朱雀と合わせると、かなりの威力となります。使ったのは佐藤戦です。

式人目 桐生きりゆう

鎌を使う堕天流だてんりゅうの男で通称「死神」です。下の名前はあります。武器は「血塊鎌けっかいがま」です。

堕天流奥義 漆黒の爪

自分の前で一回転して相手の攻撃を弾く技です。

堕天流奥義 鎌鼬かまいたち

鎌を縮めて相手を攻撃する技です

参人目 八雲やくも

槍を使う明仁流めいじんの男です。下の名前はあります。武器の名前も考えていますw

明仁流奥義 旋風踏込斬せんふうふみこみざん

斜め前に跳んで相手を横薙い（よこばらい）します。

明仁流奥義 神速五月雨突しんそくさみだれつぎ

高速で突きをしながら相手の元に近づく技です。

肆人目 大神 煌輝こうけい

龍騎の兄です。神鳴二刀流を使います。武器は「桜花おうか」と「蓮華れんげ」です。

神鳴二刀流奥義 憐花れんか

下段と上段を同時に攻撃し、がら空きの部分を攻撃する技です。

神鳴二刀流奥義 陽炎かげろう

刀を投げ、弾かれた所に加速し、一方の刀で相手を崩した後、弾かれた刀で攻撃します

神鳴二刀流奥義 水蛇すいじゃ

麒麟と同じです。

第壹部の紹介はこれで終わりです第貳部に行きます

第貳部 「龍騎神話編」について

こっちは武神になったあとの話です。各地をめぐり、強い人と戦うのがメインの話です

龍騎は省略します

壱人目 鬼

・・・特に言うことがありません武器は大剣です

貳人目 村瀬 朶むらせ しおじ

弓使いの女で村瀬流です。一応第貳部の大事な人物です。

村瀬流奥義 双? 矢そつぎよくや

加工されている矢を使って矢を曲げる奥義です

村瀬流奥義 破魔矢はまや

先が鉄でできている矢を上空に放ち落下の衝撃で相手を攻撃します

参人目 丸山 宗吾まるやま そうご

村瀬の城を襲った軍のリーダー的存在です。流派は破爪流はそうです武器

は二本の刀を使う二刀流です。

破爪流奥義 虚無きよむ

片方の刀を逆刃で持ち、敵の攻撃を受け止めながら敵を倒します。

破爪流奥義 曼荼羅の陣まんだら

両方の刀を逆刃にして、守りを固める技です。

肆人目 小林 裕馬こはやし ゆつま

龍騎と村瀬の二人旅で最初に戦った相手です。流派は総亥流そうがいで武器は槍と刀を合わせたような武器の薙刀なぎなたです

総亥流奥義 蒼風滅相撃そうがふめつそうげき

小林が軽く跳び、勢いと薙刀の間合いを活かす回転斬りです。

御人目 安西 蒼真やすにし そうま

龍騎の好敵手となった、刀使いの相手です。流派は蘇澳流そおうで武器は刀です。何本か持っていますが、基本的に一刀流で戦います。ちなみに村瀬と合わせてこれからの大事な人物になります。今は奥義は一つしかありませんがこれから出番は作ります。

蘇澳流奥義 紅煉くれん

龍騎の連撃のように、腕をひねって、肩甲骨を伸ばし、刀の間合いを伸ばして敵を攻撃します。

碌人目 佐藤 美穂さとう みほ

村瀬を嫉妬させた短髪の女の子です。流派は饗饌流きょうけんで武器は、太い棒状の棍こんです。一応ツンデレキャラを狙ってみましたが・・・失敗したと思います。これからどうするかは現在未定です。一応重要人物にはなります。



響饌流奥義 むそうれんだん 無双連弾

棍を高速で突きながら進み、内蔵を破壊する技です。

響饌流奥義 てんけつ 天穴

狙いすました棍を相手のみぞおちに狙って突き、その際に螺旋状に回転させ威力を上げます。

響饌流奥義 ちさいしゅう 地碎衝

頭上で棍を高速回転させ、その勢いを利用して、相手を上からたたき潰します。

ちなみに、龍騎が殺さなかった人物はこれからも出番はあります。今は出番のない八雲もこれから帰って来るのでその時をお楽しみに。読んでくれる皆さんにお願いがあります。お願いですから感想やレビューを下さい本当に欲しいです。皆さんの感想でこの作品やこれからの作品が良くなっていくと思うので、本当にお願いします。返信は必ずしたいと思っていますので、本当にお願いします。返すだけではこれからも応援宜しくお願い致します。

## 番外篇 人物紹介（後書き）

人物紹介でした。全員分載せてあるので、ぜひ読んでみてください。何度も書きましたが、感想がとつても欲しいです。どんな事でも構いません。誰かの番外編を書いてと言ってくだされば書きますし、こうした方が良いと言われれば出来るだけ修正しますし、なので皆さんお願いします。

この作品も本当にたくさんの方に読んでもらっています。とても励みになっています。皆さんの期待を裏切らないようにこれからも頑張るので応援宜しくお願いします。

## 第壱話 神鳴流の実力（前編）

強さを求め旅を始めた龍騎であつたが、なかなか強敵と会えず

退屈な旅となつていた。「いい加減骨のある奴を斬りたいよ……」

思わず愚痴をこぼす龍騎であつたが道中の村人からある情報を得ていたのである。

「こちら辺には「死神」が出てよく旅人を斬るあんたも気をつけな」

「死神」がいると言う事だけで、詳しいことは何も分かっていないがそれでも

龍騎の強者への乾きを癒すには十分であつた。「その「死神」さんとやらは俺が斬る！」

そう意気込む龍騎であつたが中々お目当ての「死神」には会えず、退屈な旅となつていた。

結局誰とも会わないまま夜を迎えたある日、遠くから大きな悲鳴が聞こえ、龍騎は

声の方向へと走つていった。そこには人が横腹を真つ二つにされ血が吹き出ている、

見るも無残な死体が転がっていた。「これは「死神」の仕業か？」と独語した龍騎の

背後に強烈な「殺気」を感じた龍騎は即座に後ろを向いた。そこには血らしき物が付いた

武器「鎌」を持った男が龍騎を見るなり鎌を振り龍騎を殺そうとしていた。

「あんたが例の「死神」か！」その龍騎の声ごと切り裂くように男は鎌を振り攻めて来た。

「所詮鎌は大多数相手の武器一対一ではどう考えても俺の刀に分がある」そう独語し龍騎は

刀を腰から抜き反撃に出た。鎌の攻撃を刀でいなし隙だらけの腹を斬ろうとした龍騎の策は

鎌を自分の前で回転させる「墮天流奥義 死神の爪・・・」なる技によって防がれ不発に

終わった。「俺の太刀筋を避ける相手なんて久々だよ、あんた名前は？」そう尋ねる龍騎

にあくまで冷酷に男は鎌を振るった。無視かよ！と叫ぶ声も気にせず男は前方に跳ぶ力を

利用し龍騎を裂こうとしたが、龍騎の素早いバックステップによって回避された。

「それが墮天流ね、だったら今度は神鳴流の力見せてやるよ」と言い放った龍騎はすでに

その場にはいなかった。ジグザグに男へと接近した龍騎の眼は、殺気で満ち溢れていた。

ジグザグの軌道から急に飛び出したかと思えば神速の速さの居合をぶつけるところだった。

「神鳴流奥義 花瓣！」と叫び繰り出されたこの技はま  
ず刀を抜く動作から

攻撃だった。居合で抜かれた刀の柄の部分で男のみぞおちを突き刺し、ひるんだ男の

頭上まで刀を振り上げると、一気に刀を振り下ろし男を切り裂いた。男は素早い動きで

後退しようとしたが、腹に柄を刺されたせいで一瞬動きが鈍り腹を斬られ血が吹き出していた

「どうした？もう終わりか？「死神」はこんなもんか？」と挑発する龍騎に対し男は自分の

血を鎌に塗り鎌からは血が滴り落ちていた。「俺の名は桐生、俺を斬るとは中々の腕だ、

だが俺は殺せない！」そう一喝してこちらを睨みつけた。桐生は鎌を伸ばし自分の身長の

三倍はある鎌にまで変化させた「俺の鎌の名は血塊鎌、  
墮天流に伝わりし

伸縮自在のこの鎌にて貴様を切り裂く！」それを聞いた  
龍騎は怯むどころか刀を握り締め

笑顔<sup>・</sup>を浮かべていた。「俺の名は龍騎、神鳴流最強にな  
るため、「武神」に

なるためにあんたを斬る！」と力強く叫んだ。両者は同  
時に互いの武器を振るった・・・

## 第弐話 神鳴流の実力（後編）（前書き）

「死神」桐生との対決中である龍騎。両者限界が近いなか、新たな奥義で桐生を倒すことができるのか？

## 第貳話 神鳴流の実力（後編）

「死神」と呼ばれる鎌使い堕天流桐生との命を削るような戦いが続く中、同時に龍騎はこの戦いに楽しさを覚ていた。それは強くなるために旅に出て初めての大事物であったからである。桐生の伸縮自在の鎌「血塊鎌」が龍騎を決ろうと、牙を剥いた。普段中々来ない横からの決るような攻撃は、かわしきれずに生々しい傷跡を龍騎に残していく。

「やっぱあんた強いよね、会えて良かったよ。」

龍騎が素直に桐生の武を褒める。桐生が血塊鎌を限界まで伸ばし、龍騎の攻撃を防ぎながら全力の一振りを決める。龍騎は怯むことなく、前に進んだ。その一振りさえ見切れれば勝てると思込んでの突進だった。しかし、この攻撃は全て罠であるということには気づけなかった。桐生が吼える。

「堕天流奥義 鎌鼬！」

急激に鎌を縮めそのまま高速で一回転し龍騎が「神鳴流奥義 花瓣」で切り裂いたのと、同じように腹を切り裂いた。

「クソツタレが、俺が付けたのと同じ傷を付けやがったな？」

腹から血が滴り落ちる、しかしそれは桐生とて同じ事であった。両者出血が止まらないのである。龍騎もこうなってしまうては楽しむ余裕も無い。

「もうちよいあんだと戦いたかったけどこのままじゃこんな所で何も出来ずに死ぬ。」

強くもなれず、武神にもなれず。こんな所で死ねる龍騎ではない。一度刀を鞘に戻し、居合の構えを取る龍騎。それに反応し鎌を縮めた桐生。桐生目がけて加速する龍騎。防御にでるかと思われた桐生も鎌を龍騎に届く範囲まで伸ばし龍騎の刀に仕事をさせる前に決めるつもりであった。それを見た龍騎は桐生に届く前に刀を抜き鎌を



いなしながら前進する。滑らせながら迫ってくる刀に桐生は呆然となった。

「神鳴流奥義 翠蓮！こいつで決める！」

大きく真一文字に刀を振るったが、これは虚空を斬るだけになってしまった。桐生の素早いバックステップでかわされた。しかし、鎌鼬で罠にかけられたように今度は龍騎が罠を仕掛けた。龍騎はわざと外したのである。この動作が翠蓮の始まりであった。振り切った刀を持ち替え今とは真逆の軌道で刀を振るう。しかし、桐生はすでに横切りの届く範囲にはいなかった。桐生はこの「翠蓮」をかわし、次の一撃で龍騎の首を取るつもりであった。しかしその計画は無意味であった横切りの流れであったはずの刀の動きが「突き」に変わったのである。花瓣で切り裂いた傷跡に突き刺された桐生には立ち上がる気力は残されてはいなかった。横から縦へ。これが神鳴流奥義の一つ翠蓮である。この瞬間勝敗は決した。勝ったのは龍騎。しかし、龍騎もまた、腹を斬られていて限界を迎えていた。急いで止血をする。

「堕天流の「死神」桐生 中々強い奴だった・・・」

強敵との戦いが終わった開放感と、また一つ「武神」に近づいたという満足感に龍騎は包まれていた。

## 第貳話 神鳴流の実力（後編）（後書き）

今回で桐生戦は終わりです。今回と前回で文章表現がまるで違うのは、未だに書き方が定まらないからです。ようやく落ち着いてきたのでやっと読みやすい作品になったと思います。これからも精進するので皆さんよろしくお願いします。

## 第参話 刀対槍

墮天流の桐生との傷も癒えきらないまま、龍騎はとある城を目指していた。その城は建国10年と出来て間もない新興国ではあるが、強い武を求め世界各国から強い流派を求め続けている。ここなら極限の戦いが出来ると考えた龍騎は城を目指し歩き続けていた。城までの距離はそう遠くなくもうかすかに城は見えていた。「今あの城で一番強い流派は槍の「明仁流」古くから伝わる名門か・・・」明仁流はるか昔の戦乱で一騎当千の戦力があつたと言われており、武神候補も何人か居る。しかしここを超えなければ武神などにはなれはしない。城についた龍騎は迷わず道場に行き迷うことなく強く言つた。「頭首は誰？俺と闘ってくれない？」明仁流にとつての久々の挑戦者に周りからは笑い声が聞こえる。「頭首は俺だが・・・」とやる気がなさそうに出てきた一人の青年。「この俺、明仁流と戦うの？」あきらかに馬鹿にしたような声で、龍騎を煽る。「俺とじゃ嫌？」龍騎も全く物怖じせず強く言つた。「だったら少し遊んでやる。命の保証はないがなっ！奥に來いそこで仕合をする。」青年は先に奥の広間へといった。龍騎も後を追う。民も觀戦に訪れている。「俺は明仁流の八雲、貴様の名前は？」八雲が問う。「俺は、神鳴流の龍騎。」これだけ言えば二人には十分である。八雲は槍を、龍騎は刀を抜く。先に踏み込んだのは龍騎、一気に間を詰める。八雲は刀が届く以前の距離から、龍騎を刺しに行く。ちつと龍騎は舌を鳴らした。槍の利点はその長いリーチにある。相手が届くより先に攻撃し敵に何もさせないまま、敵を貫く。これが槍の強さであり、明仁流がかつて一騎当千の力を持っていた理由である。全く攻めれない龍騎をあざ笑うかのように、八雲の攻めは続く。「明仁流奥義 旋風踏込斬！」八雲は勢い良く斜め前方に出たかと思うと、龍騎の上から、槍を刀のように横薙ぎで振るってきた。横にも

避けきれないし、後ろにも、リーチがある。ここは後ろに下がって軌道を刀でずらすべき、と思った龍騎であったが八雲の腕はその予想を遥かに超えていた。振りの途中で急激に加速して迫ってきた槍、龍騎も下がりはしたが腹を裂かれ、血が滴り落ちる。龍騎はジグザグに動きを絞らせないつもりであったが八雲は冷静に龍騎の動きを読み、たたき潰した。「こいつ相手じゃ花瓣も翠蓮も使えはしない、こうなったら・・・」こう独語する龍騎ではあるが、八雲はいたって冷静に己が槍を振るってきた。「明仁流奥義 神速五月雨突！」槍を突きながらこちらに突進してくる八雲。後ろに下がるが壁が迫って、逃げようがなくなる。そうなる前に横に動いた龍騎であったがそれが間違いであった。「明仁流奥義 旋風踏込斬！」高速の突きから横袈いへと変化した、八雲の槍。さっきとは違いモ口に食らったため血が噴き出てきた。「このままだと俺は本当に死ぬ、こうなったらあの奥義を決めるしか無い」覚悟を決めた龍騎は一気に八雲へ突進を見せるが「明仁流奥義 神速五月雨突」で弾かれそうになる。しかしさっきとは違い槍をかくぐりながら、少しずつ距離を埋めていく。危険を感じた八雲は旋風踏込斬で龍騎を吹き飛ばそうとしたが龍騎はこれすら潜って躲すようやく龍騎の距離になった。槍の弱点は潜り込まれた時の対処が難しいことにある。八雲はこの弱点を埋めるために刀身を短く持ち直して槍を振るう。「俺のあの奥義は奇襲用の一発技、外せば終わりだが槍相手なら決まれば俺の勝ちだ。」懷まで近づき龍騎が勝負を決めに行く。「神鳴流奥義・・・」言い終わらないまま正面から龍騎の姿が消える。しかし八雲は見切っていた。敵が左に高速移動したことを。槍を左に振るう。しかし槍には切った感触がない。「後ろかつ！」背後へ槍を下げたがここにも感触がない。完全に龍騎を見失ったのである。一瞬ではあるが戦いにおいて一瞬敵を見失うのは死を意味する。その時上から何か液体が落ちてきた。それは血であった。そして上には・・・龍騎が舞っていたのである。そのまま斬りかかるが八雲が槍を突き上げ、龍騎を撃ち落そうとする。「・・・見えたっ！」神憑り

的戦闘能力によって八雲の槍に龍騎は両足を載せた。これで、八雲は槍を振るえない。勝負は決まった。重さで槍が地面につく瞬間――虚蝉！！」咆哮しながら八雲の上半身から左足までを一気に切り裂く。八雲が地面に倒れ龍騎は刀をしまい傷を確認する。深いが何とかかなりそうだ。「これが神鳴流奥義 虚蝉、相手にとって見ることの出来ない技――虚蝉は高速で敵の横から後ろまで回り込み、空中から敵を切り裂く大技である。かなりの身体能力が必要ではあるが、決まれば躲されることはまずない。見切り不可能の秘技それが虚蝉。そして言い終えた龍騎も地面に崩れる。疲労で立てなくなっているのである、しかし龍騎には勝った充実感から笑顔がこぼれていた。

## 第肆話 武神戦開幕（前書き）

明仁流の八雲も無事に打ち倒した龍騎。自信をつけた龍騎は武神のいる武神殿に行き、武神と戦うことを決意する

## 第肆話 武神戦開幕

明仁流の八雲を倒したことにより自分の剣に揺ぎ無い自信を得た龍騎は、ついに今の武神と戦うことを決意し、世界一の決闘場「武神殿」へ向かい武神と戦うことを決意した。

「今の武神って誰だっけ？よく憶えてないんだ。」八雲が尋ねる、八雲は龍騎に虚蝉を食らったものの芯は外されており、傷は負ったが命に別状はない。

「今の武神は・・・おそらく負けてなければ俺の・・・兄だ」龍騎が声を低くして語る。

「そういえばそうだったかもしれない、けどあの入確か二刀流じゃなかったか？お前は一刀流なのに、何が違うんだ？」八雲が尋ねる。

「あいつは、神鳴流の奥義を全て会得した。その結果あいつは神鳴流には限界があると言って家を出て行きその結果あいつは神鳴の剣を二つの刀で振るうことこそ最強・・・と考えあいつは神鳴を越えたと語り、流派 神鳴二刀流を創り上げた。その結果あいつは、誰よりも強くなり、武神になったんだ・・・」龍騎が憎しみを込めたような口調で喋り始める。

「何でそこまで怒るんだ？お前の兄さんは、そっちの方が強いと思っただけなんだろ？そしてしっかり結果に表した、それも武神という結果でな。嬉しくないのか？」八雲が尋ねる八雲には何故そこまで、龍騎が怒るのか理解できなかった。

「あいつは！俺達を利用して上に上がった。あいつは神鳴流の次期頭首だったのに！俺だって、あいつのことを尊敬してた。本気で敬ってた！そんな人の気持も知らずに俺達から離れて、強くなつて、武神になった。そんなの許せるかよ！」龍騎が激昂する。そして龍騎は言葉を続けた。

「だからあいつはこの俺が！神鳴流の俺が斬らなくちゃいけない。」

そしてあいつに分からせるんだ神鳴流の強さを！そのために俺はこの剣の道を歩んできたんだ！負ける訳には行かないっ！」龍騎の強い覚悟に押され、八雲に戦慄が走った。

「そうか、なら勝ってこい但し・・・気をつけろよ、相手は武神なんだからなそして・・・俺以外の奴に負けるなよ。」こうして龍騎は武神殿に旅立っていった。

数日後ー武神殿

「今日もこの武神殿に新たな挑戦者がやって参りましたー！本日の挑戦者はー現在の武神の弟、最強の流派と謳われたあの神鳴流の剣を受け継いだ天才、大神 龍騎ですー！！」ナレーターの威勢のいいアナウンスで場内に入場した龍騎。何度か大会で優勝もしているので、知名度は高く観客席からは盛大な拍手を受け入場した。

「対する武神はー武神になってからの試合で、傷ひとつ受けずに勝ち続けているこれまた天才、神鳴流の剣と独自の剣が相まって出来た流派 神鳴二刀流のー大神 煌輝ですー！！」場内が大歓声に揺れる。驚異的な強さと、カリスマ性を持つことからファンも多いらしい。しかしそんなことはどうでもよかった。龍騎に取ってこの試合は、煌輝を殺せさえすればそれでいいのだから。

「龍騎、お前もここまでこれたか。だが俺は神鳴の太刀筋を全て理解している。お前に勝ち目はないどうだ？諦めて俺のもとで二刀流にならないか？二刀流はお前に別次元の強さをもたらず。どうする？」

煌輝の煽りに龍騎は乗るわけがなかった

「俺は、あんたにこの神鳴流の強さを教えるためだけにここにいる。二刀流にする必要なんてない。俺はお前を斬る。それだけだ」冷たく言い放った龍騎。

「話を聞かない弟には躰が必要だね、面倒だけど・・・殺すよ」煌輝から冷気のようなものが出てくる気がした。しかし怯むわけにはいかない。アナウンサーの試合開始の合図になる

「それでは、武神決定戦の開幕ですー！！」言い終わったときには刀



のぶつかる音がした。まず飛び込んだのは龍騎。それをいなす形で煌輝も刀を抜いた。正面で一度刀を当てた後、上空に舞う龍騎。そこから斬りかかるも、さつきとは違うもう一方の刀で対応する煌輝。背面から斬ろうとするも、煌輝に弾かれ無意味となった。しかしここで攻めないわけにはいかない。怒涛の猛攻を見せていた。後ろに飛ばされるも、その反動で煌輝に向け加速し突っ込む龍騎。煌輝は一旦上に跳躍し、横へと弾き飛ばした。叩き付けられる前に床を受身の姿勢で転がり、立ち上がったときには煌輝に向かって斬りかかっていた。二人とも疾すぎる。観客の誰もがその動きに追いついていない。今も、飛びかかった龍騎に回りこんで、刀を振るう煌輝だったがそこには、龍騎はいない。後ろを見せていた龍騎が回転斬りで煌輝に迫る。刀を止め、防ぐ煌輝だったが刀の勢いは完全に龍騎にあり徐々に煌輝の刀が押し込まれている。しかし、彼は二刀流空いている剣で龍騎の右手を斬り下ろしに行く。慌てて刀を引つ込め後ろに下がって行った龍騎。この戦いは、そう簡単には終わらない。そう思わせる最初の攻防であった。

「息もつかせぬ展開の今回の武神決定戦、白熱の勝負はまだまだ続きそうですっ！」アナウンサーの実況にも熱がこもっているような気がした。ここで龍騎に不安なことがある。それはこちら側の全力の攻めにまだあいつは余裕を持っているということ。ほとんど一本の刀でここまで戦っていることである。やはり、あいつは強い。けどど負ける訳にはいかない。龍騎はもう一度煌輝へ踏み込んだ。

## 第肆話 武神戦開幕（後書き）

強引な流れですが早くも、武神である兄、煌輝との決戦です。毎度毎度読みづらい文章構成で本当に申し訳ないと思っております。そろそろ皆さんのような小説を書きたいな〜と思うこの頃、皆さんぜひ応援宜しくお願い致します

## 第御話 激戦（前書き）

兄との死闘を続ける龍騎、満身創痍の中神鳴流の奥義は炸裂するの  
だろうか？

## 第御話 激戦

一進一退の攻防が続く龍騎対煌輝。命を削る戦いではあるが、煌輝からは明らかに余裕が感じられた。死に物狂いで攻める龍騎に対し二刀流の利点を生かし、全てをいなす煌輝。誰の目から見ても、煌輝が勝つと確信していた。龍騎が一度煌輝に背を見せてから、遠心力で加速する刀を回転斬りでぶつけてきた。今まさに切っ先が煌輝に当たるその瞬間――片方の手でいなしながら自分も回転し、もう片方の刀で……龍騎の背中を真一文字に切り裂いた。がはつと痛みには耐え切れなかった龍騎が声を漏らす。一旦間をおこうとした龍騎に煌輝の追撃が迫る。今度は縦に引き裂かれた。龍騎の背中に十字架のような傷ができる。

「お前の大好きな神鳴流はそんなもんか？俺にお前は傷ひとつ付けてさえないぞ？」

「五月蠅い、あんたは必ず斬る、少し……黙ってるっ！」  
龍騎の怒声が飛ぶ。それに反応してか煌輝は一直線に龍騎へ向かって加速した。

「お前に刻みこんでやる、俺の神鳴二刀流を！ 神鳴二刀流奥義 憐花<sup>れんか</sup>！」

二つの刀を構え迫ってくる、煌輝。龍騎もこのまま斬られるわけにはいかない。煌輝の最初の攻撃は、下段、足元への横切りだった。これを刀で止める龍騎。しかし上段がから空きである。刀を戻そうとした龍騎だったが気づいた頃にはもう遅かった。刀を押さえられ防御に出れない龍騎に煌輝がもう一方の刀で斬りかかる。これで終わりか――誰もがそう思った瞬間龍騎は煌輝の腹を蹴り、刀が心臓にまで届かないように、スペースを作った。しかしそれで防げたわけではない。煌輝の刃が心臓をかする。全身から嫌な感じの汗が出

た。何とか刀を振りほどいた、龍騎だった。煌輝はすでに下がっており、とても追撃を加えられるような距離ではなかった。そして龍騎の身体も追撃を加える元気は無かった。

「煌輝選手の圧巻の一撃！また掠り傷一つ受けずに相手を潰すのかっ！」

アナウンサーの声にも熱が入る。立つてるのも辛くなってきた。悔しいがこのままだと何も出来ずに龍騎は死ぬことになる。兄をこの手で倒すと誓ったのに……

「どうにかしてあいつを倒さなきゃ、何か使える奥義は……」

龍騎が考える。花瓣は隙が大きく腕を斬られそうなので使わない、翠蓮も同じ。そう考えてる間も煌輝の攻めは続く。今度は、龍騎が防御の立場に回った。圧倒的劣勢である。ここで虚蝉も思いついた。があのだより隙が大きく、神鳴流の奥義を分かっている煌輝には返り討ちに合うだけと考えた龍騎は虚蝉も諦めた。

「どれを使っても決まりはしない、むしろその大きな隙で俺が死ぬ。他に使える奥義は何か無いのか？他の神鳴流の奥義は……」  
煌輝との打ち合いの中、それを考えていた龍騎だが考えながら相手を出来るほど煌輝は甘くない。徐々に顔が、身体が、斬られていく。出血も多くなってきた。

「なあ、そろそろ決めてもいいか？俺も暇じゃないんでね」

勝利を確信して煌輝が龍騎を挑発する。しかしそんな声は龍騎の耳には届いていなかった。煌輝が今までにない振りの大きい攻めを見せてくる。龍騎の得意な空中での回転斬りを見せてきた

「これでー終わりだ、お前の命俺が頂く！」

回転斬りを半歩下がり刀を当て躲す。だがもう一方の刀の恐怖は終わっていない。振り上げた刀は大きな袈裟斬りで龍騎を狙う。そのまま当たればそこはー心臓があった。死は免れない。刀を弾いたということは龍騎の刀も使えないということである。がら空きの龍騎が見えていた。彼は消えたのだ。正確には消えるほど早く、

沈んでいた」。しかし袈裟斬りは直に当たる。切っ先が近づいたその時――溜めた膝のバネで龍騎は煌輝の目の前まで急加速、そしてその勢いを下から上への斬撃に転換した。

「これが、神鳴流だっ――！」

龍騎の咆哮とともに煌輝から大量の血飛沫。この戦いをひっくり返すほどの威力であった。煌輝もこれ以上の追撃を回避するため刀を振るったので、龍騎は一旦距離を置いた。

「神鳴流奥義　麒麟きりんか！小癩な真似を……」

動揺の声が煌輝から聞こえた。ついさっきまで死にぞこないのだった弟からこれほどまでに強烈な一撃を浴びるとは予想外だったであろう。会場からも歓声が上がる。

「お前は覚えているだろう？神鳴流奥義　麒麟さ、俺の返し技は痛かったか？」

さつきとは違い龍騎が煌輝を挑発する。麒麟とは伝説の獣であり、殺生を嫌う生き物。だからこの技は心臓とは反対を斬るようになっていて、そう教えられている。技の原理としては、敵の攻撃を身体から力を抜き、重力の力でかわし、その勢いと自分の脚力を合わせることで瞬間的に相手のもとへ詰め寄り、隙の出来ている身体へ斬撃を叩き込む技である。隙は少ないが、動きが遅ればそのまま死ぬというリスクの大きい技だがここの一番で龍騎はやつてのけた。これで自分にも勝ち目があることを確信する。逆に煌輝は一筋縄では行かない事を痛感した。

「まさかの龍騎選手の反撃！この勝負どちらに軍配が上がるのか全く予想がつきませんっ！」

そしてこの勝負の決着は徐々に近づいていた――

## 第御話 激戦（後書き）

あと2話程で終わるだろうこの作品。もし全部読んでる方が居たら本当にありがたいです。小説にすらなつてなかった第壱話と比べる  
とだんだんマシになってきたと

思います。皆さん読んでくださったらぜひ、レビューをお願いしますね。

## 第碌話 終局（前書き）

闘いの終わりが近づいてきた二人。最後に立っているのは果たしてどちらなのか、激闘に幕が閉じる――



## 第碌話 終局

神鳴の返し技「麒麟」を発動させ、形成を逆転までは行かないが、追いつき勝負を振り出しに戻した龍騎、だからといって彼に余裕が出来るわけでもない。そして煌輝もまた余裕が無くなり命の危機に晒されることとなった。二人とも立っていることさえ辛い。しかしどちらにも負ける訳には行かなかった。龍騎は流派の誇りのために。煌輝は自分の創り上げた流派の強さを知らしめる為に。今までとは違い、先に動いたのは煌輝だった。逆刃で持った刀でまずは下段、足を狙う。龍騎は刀を当てたあと、後ろへ大きく跳んだ。距離を取るためである。煌輝もそれで攻め手を緩めず追撃に走った。煌輝が普段とは違うおかしい構えを取る。それはまるで刀を投げる様な構えであった。当然ながら刀は投げて使うような武器ではない。刃が繊細ですぐ壊れてしまうし、そもそも弾かれては貴重な武器を失う。これでは全く意味が無い。

「刀を投げるわけがない、これはハツタリだろ？」

そう独語する龍騎。しかしこの大事な局面でハツタリをするような煌輝ではない。あり得ないことが龍騎の目の前で起こった。そしてこれは煌輝が本気を出した瞬間でもあった。

「まさかこれまで出すなんてな、褒めてやるだがこれでさよならだ！」

神鳴二刀流奥義 陽炎かけろっ！！」

煌輝は、上半身を後ろへ捻ったあと、右手の刀を龍騎目掛けて本当に投げてきた。動揺を隠せない龍騎だが、刀で何とか弾く。弾かれた刀は上空へ上がった、その刀目がけて煌輝が跳ぶ。その際には左手の刀で龍騎を狙う、何とか防いだがそこからの煌輝の攻撃は疾く、そして何より、強かった。左手で斬り終えた時、すでに右手には刀を握り締めていた。左の攻撃が終わり一息付けるかと思ったその瞬

間――右手での袈裟斬りが入った。左目の横から、鼻筋、口元、そのまま腹までを切り裂くとても大きな袈裟斬りだった。着地した時煌輝は左手の刀で突きを繰り出す。しかしこのままやられるわけにも行かない。先程の返し技を放つ。

「神鳴流奥義……麒麟！」

身体を一気に沈めてその勢いを利用して敵を斬る返し技。しかし一度喰らった技をなんとも喰らうような煌輝ではない。攻撃を仕掛けてくる下段に刀を置いておき、龍騎の麒麟を防ぐ。勢いのある龍騎の刀の方が鍔迫り合いを制すところだったが、煌輝はすでに後ろに下がり麒麟は不発に終わった。

「まだやるのか？これ以上は本当に死ぬぞ？」

煌輝の声が聞こえる。左目から入ったため、心臓には当たっていないが、致命傷である。意識が朦朧として来た。煌輝の姿が霞んで見える。もう限界なのかもしれない。龍騎の意識に「諦め」という言葉が浮かぶ。ここまで自分を磨いてきたのは煌輝を殺すため。しかし兄との実力の差は圧倒的であった。いまの煌輝の奥義 陽炎は全く手も足も出なかった。ここで床に倒れたら全て楽になる、そう思ったその時――

「もう限界か？昔のお前はもつと強い心があったのに今のお前はそんなもんか？」

それじゃあ俺ひとり殺せないぞ？」

煌輝の声が聞こえる。お陰で目が覚めた。目の焦点にしっかりと煌輝を定める。戦うという強い意識を取り戻したものの身体の限界は近く、そろそろ決めなければ危ない。自分の刀を、今までの鍛錬を、兄への想いを、神鳴への想いを、そして――龍騎の想いをこの一撃に託す。その覚悟で刀を強く、強く握りしめた。

「これで終りにする、俺が今までの人生で刻みつけてきた想いの全てを、この一撃に――！」

力強い咆哮のあと一度刀を鞘に収める。抜刀術で勝負を決めるつもりだ。勢い良く龍騎が煌輝に向け加速する。今までで、最も疾い速

度であつた。煌輝の横切りに、龍騎は身体を沈めることで答えた。最初は返し技で攻める。

「神鳴流奥義 肆の型 麒麟！！」

驚異的なキレで、煌輝の懷まで潜る。疾さこそ、龍騎の持ち味であつた。煌輝は一方の刀で受け止めながら後方へ跳ぶ。一旦間を置く為だ。しかしそれを許さないかの様に龍騎の攻めは続く。

「神鳴流奥義 壱の型 花瓣！！」

刀の柄の部分の腹に押し込み体勢を崩したところで、上段からの斬りを入れる技。それでも神鳴流の全ての技を理解している煌輝には、その次が分かる。煌輝は、自分の刀で龍騎の刀の柄をずらしながら、龍騎に向かって突きを繰り出す。龍騎は避けるも顔の横をかすめて血がでる。だが今の龍騎にはこんなささいな傷どうでも良かった。要は煌輝の命を奪えばいい。ただそれだけである。柄を腹に指す直前、龍騎の刀は予想外の動きをした。柄は横を向きここで刀は抜刀された。龍騎が攻めのリズムを変えた瞬間である。

「神鳴流奥義 貳の型 翠蓮！！」

一度手前で空振りした後、刀を持ち替え、腹の手前で斬りの動作から突きに移項する、流れるような技。さらに突きの際龍騎は地面を踏み込み、加速した突きを見せる。ここで今度は煌輝が予想外の動きをした。それはまるで麒麟のような動きを――

「神鳴二刀流奥義 水蛇！！」

一度龍騎の刃の真下まで沈みそこから翠蓮の突きを弾くつもりだつた。しかし振り上げた先に剣はなく――虚しく虚空を斬るだけであつた。龍騎は完全に正面から消えた。煌輝はこの事実を身体が理解する前に、本能でこの事実に対処しようとした。無意識に自分の身体の内脇に刀を振る。そしてその後、この技を理解する。神鳴流奥義 虚蝉龍騎の一番の得意技にしてこの技は――煌輝が龍騎に伝えた技であつた。内脇を斬ってもそこに龍騎の姿は感じられなかつたので今度は一方の刀で自分の背後を、もう一方の刀で自分の上空を斬つた。これなら必ず当たるそう睨んだ。そしてその予想は的中し

た。龍騎は自分の上空に浮かんでいて、首筋を横切りしそうなそんな構えであった。先に上空に置いた刀で龍騎の刀を防ぐ姿勢をとりながら煌輝自身は後ろへ下がりがりながら、もう一方の刀も龍騎に向ける。上空では地面の様な動きは出来ない。その間に斬るつもりだった。

「残念だったな！お前の得意な神鳴流奥義 参の型 虚蝉は確かに疾い。だがこうやってお前の姿を捉えればこんな技無意味！これでサヨナラだ、龍騎！」

確かにこの距離なら横切りも突きも届きそうにはない。しかしこの距離を埋める方法を龍騎はこの闘いの中で見つけていた。そしてそれは今の龍騎の必殺必中の技となった。龍騎が吠える。

「神鳴流奥義 極きわめの型 虚陽うつかけっ！！！！」

龍騎はこの距離の差を兄、煌輝の陽炎の様に刀を投げることで埋めた。二刀の刀の間を縫うようにして龍騎の刀が煌輝へ羽撃く。その刀は――煌輝の横腹を貫き煌輝は地に倒れた。龍騎が痛みをこらえて何とか立ち続ける。龍騎も陽炎の傷が激しく勝ったという実感が沸かない。そしてどうしても煌輝に聞きたいことがあった。

「どうして、神鳴から離れたんだ？・・・・・・兄さん」

煌輝が何とか口を開け答えようとする。

「俺の・・・・全て・・を・話す・・・・時が・・来た・・龍騎・・・・よく聴け・・・・」

兄は全てを、弟は全てを聴く覚悟を決めた。そしてこれが最後の――兄弟が話す刻となった。

## 第碌話 終局（後書き）

今回で、煌輝戦はお終いです。僕が書いてきた中では一番の物となったと思います！次回はエピソードの予定なので早いですがそろそろこの作品にも幕を閉じようかなーと思っておりましたが、ここに来てこの作品に愛着がでてきました。どうしようまだ続けようかな

## 第七話 結末（前書き）

神鳴流奥義極の型 虚陽で薄氷の勝利を掴んだ龍騎。 兄・煌輝は全てを話す決意を固めた――

## 第七話 結末

「どうして、神鳴二刀流なんて流派を作ったんだ？兄さん・・・」  
尋ねる龍騎だったが、こちらも身体は限界だった。今は何とか持ちこたえている。

「神鳴・・・二刀流の・・・意味は・・・神鳴を超えた流派を敢えて作り・・・その流派を超える事で・・・神鳴を、お前を最強の・・・流派にするため・・・」

煌輝は口を必死に動かして語り始めた。神鳴二刀流の存在意義とは、煌輝の名誉の為ではなく、弟・龍騎と自分の大好きな一族、流派神鳴流の為であったのだ。

「じゃあ兄さんは神鳴を裏切ったんじゃないくて、神鳴のために俺の為に神鳴を離れた・・・」

「ああ・・・そうだ。俺は・・・お前に強くなって欲しかった・・・お前は俺の願い通りに・・・強くなってくれたよ・・・」

兄の顔に笑みが見えた。動揺を隠せない龍騎。手が震えて刀が落ちる。

「この闘いも、今まで斬りかかってきたのも、全て・・・演技？」

「そう、お前が・・・俺への想いの強さで・・・強くなるために・・・許せ龍騎・・・」

龍騎の目から雫が落ちてくる。煌輝の命は最早風前のともし火だった。

「・・・お前は・・・神明で一番強い・・・父上よりも・・・叔父上よりも・・・お前の最後に編み出した・・・神鳴流奥義極の型 虚陽。あれは、良かった・・・」

龍騎から零れ落ちた雫はいつしか涙となり龍騎の両目から止まること無く流れていく。

「あの技は・・・兄さんの陽炎を真似しただけ・・・兄さんがいなく

ればあんな技一生創れなかった．．兄さんのお陰。だから兄さんの技陽炎と、兄さんが俺に教えてくれた神鳴の技虚蝉の名をとって．．「虚陽」と名付けたんだ．．．」

龍騎があの手に込めたのは力でも技でもなく、兄を尊敬し、神鳴流を愛し、そして兄を想う心――

「俺の．．陽炎と神鳴を融合させるなんてな．．．お前は．．．凄  
いよ」

言い終わった途端、煌輝から血がでる。吐血していた。徐々に煌輝から力が抜けてきている気がした。

「兄さん、未だ死なないで！俺はもつとたくさん兄さんに技を教わりたいんだ！兄さんに教えてもらいたいんだ！だから．．．兄さん  
っ！」

龍騎が必死で叫ぶ。想いは同じだったのに、すれ違い続けた二人。ようやく重なつた想いなのに――

「．．お前は、もう強い．．．これからは更に高みを目指せ．．．まだ神鳴には奥義が残されている。強くなれ。お前が．．武神になる今――お前は様々な流．．派の人間と戦う．．はず．．だ。龍騎．．俺は．．お前をずっと想っていた．．．俺は．．何時までもお．．前を見守っている．．．俺の弟なら．．．神鳴の子なら．．最．．後ま．．で負ける．．．な」

煌輝の動きが――止まった。龍騎には世界さえ止まった気がした。

「そんな、兄さん？眠っただけでしょ？またすぐ目を覚ますんでしょ？兄さん．．．返事をして？」

無駄だと頭では分かっているけど心の部分がそれを否定する。煌輝が死んだという事実を――

「これで、死んじゃうの？兄さん、目を．．．覚まして．．．」

心も事実を理解する。そして龍騎は哀しみに飲まれた。

「もう一回だけ．．．笑ってよ．．．兄さんっ！！兄さ――ん！  
！！」

二人が戦うときには晴れていた空が、徐々に曇り――煌輝が死んだ



のと同時に大雨が降り注いだーそれはまるで、龍騎の心をーすれ違い続けた二人を慰めるようなーそんな雨だったー

ー1週間後ー

「新しい武神がここに決まりました！無敵と謳われた天才・神鳴二刀流の大神 煌輝を破り、新たな武神の座に着いたのは若き天才！前武神の弟で、新たな天才・神鳴流のー大神 龍騎ですっ！！」  
実況の熱のこもった声の中龍騎が武神殿に入場した。しかしその顔には笑顔がない。その龍騎が周りからの質問に答える。

「これからは、ここ武神殿に居るだけではなく、様々な地方を旅しながら、新たな強敵と闘っていきたいと考えています。これまでの武神に失礼の無いように。そしてー尊敬する兄と神鳴流の名に恥じないような武神を目指していくので皆さんよろしくお願いします！」

こうして新たな武神は龍騎が務めることとなった。そして宣言通りその日の夜早速旅準備を終えて、新たな敵を求めて武神殿を後にした。

「俺、兄さんよりも強くなって必ず兄さんの想いに答えてみせるから。だから安心して見ててー」

今、龍騎の腰には三本の刀が収められている。今まで龍騎が愛用していた刀「龍鳴」の他、

兄、煌輝の刀の「桜花<sup>おうか</sup>」と「蓮華<sup>れんげ</sup>」があった。龍騎はこれまでと同じく、一刀流で敵に挑むつもりだ。けれどこの二本は兄の想いを感じるために持つことにした。龍騎は武神殿に背を向け、新たな覚悟と想いを背に、歩き始めたー

## 第七話 結末（後書き）

今回で煌輝戦は本当にお終いです。これと同時に武神になったので、第貳部の「武神激闘編」も簡潔です。後日番外編や、過去編、煌輝が主役のお話でも書こうかな〜とも思っております。

まずは次回からの第貳部「龍騎神話編」を書こうと思っております。第貳部は今までと同じようにバトルがメインですがこの物語に足りない要素も足そうかな〜と思っております。題名の神話は龍騎が神話の様に語り継がれるほどの活躍をさせるつもりなのでこの題にしました。煌輝の想いを受けて戦う龍騎をこれからもよろしく願います！

最後に、最近アクセス解析を見ると、何百人の方々にこの小説を見てくださっていることがわかりました。本当にありがとうございます。そしてこれからも応援宜しくお願いします、では長文で失礼ですが、第貳部でお会いしましょう！

## 第八話 新たなる戦い（前書き）

今よりも強くなるために旅に出た武神の龍騎。それと同時に新たな武神の報は世界中を駆け巡った――

## 第八話 新たなる戦い

強くなるために新天地へと船に乗って旅立って行った龍騎は到着早々何人かの山賊に襲われるも、何ら問題なく山賊を倒し、武芸者を探して旅を続けていたが、近くに小さな村を見つけ、そこに立ち寄るついでに有力な武芸者を探そうとしていた。そこは、とても小さな村で、人も数えるほどしかない。取り敢えず龍騎は聞き込みを試してみた。

「すいません、この辺で腕のある武芸者の話って聞いたことありますか？」

近くの青年に声を掛けてみる。

「あなたはもしかして・・・新しい武神の・・・大神 龍騎さんですか？」

青年が驚いて声を上げる。武神といえば世界中の憧れでそんな超有名な人がこんな名もないような村に来たとなれば驚くのも当然である。その隣から別な男が話しに割って入って来た。

「テメエが新しい武神か？弱そうなツラだなあ。こんな奴が今の武神なら前の武神も相当弱かったんだろうな」これなら俺は強すぎて神様になっちゃうかもな」

大柄の男がいきなり龍騎を挑発する。当然龍騎が怯むわけがない。むしろ呆れてしまった。しかしそれと同時に怒りもある。前の武神つまり煌輝を侮辱したのだ。龍騎が許すわけもない。

「そんな弱いと思うなら・・・少し遊んでやろうか？但し・・・あんたが死んでもいいならね」

「ガキが・・・調子に乗るなよ？テメエこそぶった斬られる覚悟は出来てるんだろうな？」

男は背中から巨大な大剣を取り出した。重さで地面にめり込んでいく。こんな奴に負ける気など微塵もしない龍騎の挑発は続く。

「あんたお祈りはすんだかい？ちゃんと天国に行けますようにってさ、あんたの名前は？一応聞いてやるよ感謝しな」

明らかに怒りを顕にした男。男が叫ぶ。

「デメエこそお祈り出来てるんだろうなあ？俺の名前は・・・鬼だ。この大剣がどうしてこんなに赤黒いか分かるか？血だよ。この色はいままで俺が斬ってきた雑魚どもの血さ！てめえの血もしつかり塗ってやるよ！！」

面倒くさそうに龍騎が前に進む。刀はまだ抜いてない。自らを鬼と呼んだ物が片手で大剣を持ち上げる。力だけはありそうだ。まずは横薙ぎに振るってくるので龍騎は跳んで躲した。相変わらずゆっくり鬼に向かって進む。それでも刀は抜いてない。鬼は横にある大剣をそのまま上に上げ上空の龍騎に向けて振り下ろした。龍騎は大剣が落ちる前には地面に付いており何事も無かったかのように、進む。「チヨコマカチヨコマカと・・・邪魔臭いんだよ！餓鬼が！！」また力任せに横薙ぎをしてくる。さすがに飽きた龍騎は一気に勝負を決めにかかる。

「神鳴流奥義 麒麟」

首筋に向けての太刀筋だったので潜るのは容易だった。そのまま鬼に急迫する。すぐそこなのに刀は抜いていない。この距離に入った瞬間龍騎の勝ちが決まっていた。虚蝉の構えで鬼の背後まで回りこむ。あまりの疾さに鬼は何処に行ったのか全く分かっていなかった。呆れた龍騎は背後でわざと大きな溜息を付く。ようやく鬼にも分かってくれたみたいだ、慌てて背後に刀を振り回す。それももう遅かった。

「あんた・・・弱すぎるのに調子に乗ってんじゃねえ、そして神鳴を、兄さんを侮辱するな。」

ようやく抜いた刀で鬼の背中を一刀両断する。二つに分かれた鬼が転がる。これなら山賊の方が強かったかな？とも思う龍騎に村中から歓声が起きる。さっきの青年が声を掛けてきた。

「ありがとうございます！今まで私たちはずっとあいつのせいで大

変な思いをしてきたんです。ただちょっと力があるからって僕たちをこきつかっていいようにされてきたんです。けどそれも今日で終わりです本当にありがとうございました！」

どうやらこの村は鬼のせいで大変な苦勞をしてきたらしい。龍騎は青年に、もう一度強い武芸者に付いて尋ねると青年は快く答えてくれた。

「ここから割とすぐ近くに王国があります。そこには結構強い人が居るみたいですょ？確か頭首がお姫様って言うすごい流派だった気がする……」

「お姫様が頭首？それは凄いな。ぜひ案内させて欲しいんだがいいかな？あとその姫さんはどんな武器を使うんだ？」

「僕でいいなら喜んでご案内します。えっと武器は確か……そうそう弓です弓使いです！」

弓はここ数年戦ってない相手だ。中々強い上に一国の姫と言う。興味が湧いてくるのは当然のことだった。そういう出会いの為にわざわざ旅に来てるのだから。このあと二人はすぐに出発した。それは龍騎の運命の出逢い。そしてこれが龍騎の新たな戦いになるとはこの時まで誰ひとりとしてわかっていなかった――

## 第八話 新たなる戦い（後書き）

取り敢えず第貳部の一回目だったのですんごく、弱い人を出してみました。そして次回の武神伝はこの作品初のそして僕の作品で初の女の子が登場します！今までの武神伝には無かった要素として、そして第貳部の重要人物として登場予定です。ちなみに現在もどんな性格にするか悩んでおります。皆さんこれからも武神伝の応援をよろしく願います。

## 第九話 運命の出会い（前書き）

強さを求め旅だった、龍騎。そこで強いと噂される一国の姫に会いに行くことにした。それは龍騎の運命の出会い――



## 第九話 運命の出会い

小さな村から青年の案内を受け、城を目指す龍騎。ただ黙ってるだけでも退屈なので色々尋ねることにした。

「その姫さんってそんなに強いのか？」

強くなくては行く意味が無い。念のため聞いておくことにした。

「それは、かなり強いです！昔、自分の身分を隠して結構大きい大会に出たんですけど、女はその人ただ一人で他の男を圧倒！それで優勝したんですよ！」

それは凄いと、龍騎は軽く驚いた。普通姫というのは自分で身を守るのではなく、騎士等に守ってもらうもの。それなのにその強さは興味が湧いてきた。

「んで、その人何流のなんて言う人？」

「その人は・・・昔から続く弓の名門村瀬流 村瀬 栞です！」  
龍騎が息を飲む。その音は青年にもはつきり聞こえていた。

「村瀬流だと？・・・弓を持たせたら鬼より強いとまで言わせた、あの流派だぞ？その娘が一国の姫なのか？」

村瀬流は、八雲の明仁流や、龍騎の神鳴流に並ぶ名家で弓に関しては最強とされる。後方に村瀬流さえ居れば勝ち戦。そう言われることもあったという。戦えば八雲の時や煌輝のようにかなりの傷を負うことをこの瞬間龍騎は感じ取った。

「そつか・・・次は村瀬流とか・・・大変な戦いになるな。けど俺はこんな所で負けてなんかいられない、俺は必ず勝つ！」

その時龍騎の目の前に城が見えた。

「ここがその城です、中に入りましょう」

二人は城の中に入っただけだった。

「この城、随分荒れて酷いな・・・」

そこに写ったのは、ボロボロの家や、人。城に活気はなく何時死ぬ

のかという恐怖に怯えているような目をしている民が殆どだった。

「この間までは、綺麗な城下町だったはず・・・いったい何が？」

青年もこの城の様子に理解が追いついていない様子だった。どこかに侵略でも受けているのだろうか。と思った瞬間――

「弓矢！？　いったい何処から、そして誰が！？」

龍騎の元に矢が飛んできた。慌てて避けるがそこに矢を放った人影は見えなかった。すると城門から一人の女性、女の子が出てきた。

「この城に何のようでしょうか？　今、城は疲弊しきっております。旅人をもてなす余裕など御座いません。」

弓を持った少女。その姿は、龍騎の想像を超える、美しさであった。黒髪の少女は、腰まである長い髪を垂らしこちらを真っ直ぐ見つめている。その右手には弓を持っていた。

「俺は、現武神の大神　龍騎。この城に強い姫が居るって聞いたのでここまで参りましたが、この城はどうしてこんなにも荒れているのですか？」

普段より何倍も丁寧な口調で喋る。少女、村瀬が答えた。

「この城は・・・現在他国の侵略を受けています。理由は私を含めた、村瀬流の吸収。それを拒否した我々に対し、現在このような攻撃をかけてきています。この国はもう疲弊しています。それで貴方もその国の者かと思い、つい矢を放ってしまいました。申し訳御座いません」

そこまで欲しがるのならやはり、村瀬流は相当の力があると感じた龍騎が村瀬に答える。

「いえいえ大丈夫です。大変なのです、本当は僕と戦って貰いたかったのですがそんな余裕ありませんね、僕らはこれで失礼します」  
ちよつと惜しい気もするが立ち去ろうとした時村瀬に呼び止められた。

「待つて下さい！私で良ければお相手します。その代わり私が勝つたら武神である貴方にこの戦闘に参加してもらいます。それでいいですか？」

思わぬ条件付きではあったが、拒否する理由は無かった。

「分かりました。それで条件を呑みます」

一人の強い武芸者として、そして一人の女の子としての興味もあった。

「ではこの城下町の一区画で戦いたいのですが宜しいですか？」

「ええ、構いませんそれでは早速始めましょうか」

戦う場所にはやや広めだが、問題はなかった。

「分かりました、ではよろしく願います、私は村瀬流、村瀬  
栞です」

「こちらこそよろしく願います、俺は武神の神鳴流、大神 龍  
騎です」

軽い挨拶をした瞬間――矢は飛んできた。まずは避けるがその避け  
た方向にまた次の矢が飛んでくる。何とかかわすが、全く近づけな  
い。このままでは埒が明かないので無理やり飛び込んでみる。その  
時村瀬は一つの弓で矢を二本同時に放ち龍騎の頭と足を同時に狙っ  
てきた。軽い舌打ちをしながら横に回りこみ再度接近する。今度は  
村瀬が龍騎のやや横に矢を放ってきた。村瀬が初めて矢を討つのを  
失敗したと思った次の瞬間――矢が急速に龍騎に向かって曲がつて  
きた。

「嘘だろ！矢が曲がっただと？」

言いながら後ろに下がる龍騎だが意表をつかれたため間に合わない。  
腹をかすった。村瀬はこの隙を見逃さず今度は真っ直ぐに二本の矢  
を同時に放ってきた。龍騎が大きく横に跳ぶ。村瀬の正面まで跳び  
再度急加速した。真っ直ぐ来た矢に左右に動くことで対応する。そ  
の時また村瀬が不可解な矢を放った。今度は弓を上に向け、矢を上  
空に放った。その矢を気にすることもなく前進する龍騎。切っ先が  
村瀬を捉えようとしたその瞬間――矢が降って来た。空から矢が落  
ちてきた。それは龍騎の目の前、でこをかすった。怯んだところに  
村瀬の追撃が来る。横に動くも、何発か足に刺さった。村瀬が動き  
ながら矢を放つ。龍騎に休む暇を与えなかった。

「さっきの降って来た矢の先端は、鉄だった。あの先端の重さを利用して、矢を上放った後、重さで下を向き、そのまま加速して落ちてきたんだ、こいつ相当強いぞ」

尚も矢を連射する村瀬。考える暇すら与えてくれなさそうだ。

「曲がる矢はおそらく矢についている羽を片方だけ伸ばして、風の当たり方を調節して矢を曲げたんだ。それで俺を正確に狙えるのなら、こいつは・・・」

また村瀬が弓を横に向けた。矢を曲げるつもりだ。

「村瀬流奥義 双？矢！<sup>そっきょくや</sup>」

龍騎の左側へ真っ直ぐ飛んだ矢は途中で急激な方向転換をし、龍騎の横腹に突き刺さりそうになった。刀を使わず、後ろへ下がるとすでに正面から矢が飛んできた。今度は矢を真ん中から切り裂き半分に矢を破壊して矢を無効化した。

「村瀬流奥義 破魔矢！」

上空に矢が舞う。龍騎は村瀬に突進した。元々龍騎が居た場所に矢が刺さる。至近距離から飛んでくる矢を避けたり斬りながら、ようやく村瀬の前まで接近できた。その瞬間――龍騎は消えた。龍騎の得意技虚蝉である。これで背中を斬るため回りこんだ瞬間村瀬の対処は完璧だった。龍騎が消えた瞬間、村瀬は前方に動いて、そのまま身体を捻りながら後ろを向き・・・振り向きざま矢を放った。虚蝉が見切られていたのである。虚蝉を見切られたのはショックだが、その加速を活かして村瀬に飛びかかる。勢いを殺さないため矢は切り倒した。村瀬目前でまた矢が曲がってきた。双？矢を使用した。しかも今回はほぼ同時に龍騎の横を矢が飛びほぼ同時に曲がった。龍騎が地面を思いつき蹴り飛ばし、急加速する。何とか躲した。しかしここでどの奥義を使うのが問題なのである。花瓣と翠蓮は正面からだから使っている間に討たれる。かといって虚蝉はさっき見切られた。麒麟もあるが矢の軌道を潜ったとしても次の矢を速射されては困る。龍騎にはあとひとつの選択肢しか残っていなかった。村瀬の正面でまた龍騎が消えてみせる。

「この技は・・・もう見切りましたよ！村瀬流奥義 破魔矢！」

前に飛び龍騎に背を見せながら破魔矢を放った。そして龍騎の方を見ようとしたその瞬間――村瀬が背中につけ、矢を詰め込んでいた袋に刀が刺さった。村瀬の背中にも軽く切っ先が届いていた。

「ここに刀が！？一体どうして・・・」

困惑を隠せない村瀬、見切ったはずの技にやられたのだからしょうがない。

「あれは最近俺と兄さんと編み出した、神鳴流奥義 極の型 虚陽です実戦ならあなたは死んでいたと思いますけどまだやりますか？」龍騎は虚蝉と同じように背後に回った。そして村瀬が前に出ている

その背中に向けて刀を投げたのである。

「いや、私の負けです。お強いですね流石は武神です」

潔く負けを認める村瀬。龍騎も力が抜けたような声で話す。

「貴方も強いです。今も足から血がダラダラ出てますからね、破魔矢も刺さってたら僕の身体は木っ端微塵でしょうね」

龍騎は両足から出血し、横腹からも少し血が出ていた。

「その・・・すみませんでした。大丈夫ですか？」

「いえいえ、気を使わなくて大丈夫ですよ。真剣勝負なんだから当たり前です。気にしないでください」

こうして二人の戦いは終わった。これからこの二人は長い付き合いになるとは知らずに――

## 第九話 運命の出会い（後書き）

この作品初の女性キャラの村瀬 栞でした。今回は殆ど喋ることも無かったのですが、いまいどんなキャラクターが分からなかったと思います。けどこれから村瀬は重要なキャラクターになります。文章見れば大体わかると思いますが、二人はこれから長い「付き合い」をしていきます。

という訳でこれからも応援よろしくお願いします。

第壱拾話 龍騎無双（前編）（前書き）

村瀬流の村瀬栞も倒した龍騎。次は何処に行き誰と戦うのか―

## 第壱拾話 龍騎無双（前編）

足に何本か矢が刺さりながらも、起死回生の虚陽で村瀬を倒した龍騎。今は城で傷の介抱をしていた。

「ところで、姫さんどうやって俺の虚蝉を躲したんですか？結構あれ衝撃的だったんですけど・・・」

龍騎が尋ねる。村瀬には虚蝉を躲された。今まで殆ど決めてきた大技だけあって決めれなかったのは龍騎に取って衝撃的だった。

「あの技は以前何かの大会で見せてもらいましたし、私たち弓使いは弓を放ってる間に動体視力も良くなつてきますし、視野も広くなつていきます。だから何となく見えたんです、決してはつきり捉えられた訳じゃないんですよ？」

成程・・・と龍騎が呟く。確かに村瀬の動きには驚かされた。こちらが接近しても冷静に弓を放ってきたことは今でも良く覚えている。そう考えている間に村瀬が話しかけてきた。

「もう少して戦が始まるところだったので出来ればあなたのようなお強い方を味方にしたかったんですけど、敗れてしまいましたね・・・これからは何処に向かうんですか？」

少し龍騎の心が痛む。わざわざ戦ってくれてこちらは何の見返りもないというのは少し失礼だとも思ってたがまずは、質問に答える。

「・・・これからの予定は未だ決まってませんね。この辺のことなんて殆ど知りませんからね、村瀬流がこんな所にあるなんて驚きましたよ。ところで一国の姫でもあるあなたがどうして頭首に？」

龍騎が素朴な疑問をぶつけた。普通こんなことはあり得ない。頭首なら武に専念すればいいし、姫なら政治に専念すればよい。おかしい話である。

「私には・・・姉がいました。姉が姫のとなり。男の子が居なかったので私が村瀬流の頭首になる予定でした。ですが・・・姉は戦で



逃げ遅れて・・・亡くなっただけです。そこで私が姉の遺志を次、姫でありながら村瀬の技も極めることにしたのでです。」

村瀬が哀しそうな顔で喋りだした。

「わざわざこんなこと聞いてすいませんでした。そんな事があったなんて・・・」

龍騎の声に反省の色が見える。村瀬は笑って誤魔化した。

「いえいえ、気にしないでください良く聞かれますしもう慣れましたから。それより今日はもう暗いです。今晚はここでお休みになった方がよろしいですよ？」

龍騎が窓の外を見やる。外はもう夜だった。城に静寂が訪れる。昼でさえ活気のなかったこの城は夜はより一層静まり返っていた。

「それでいいのならば・・・お言葉に甘えさせて頂きます。」

正直龍騎も疲れていたので今日はここで休むことにした。

「何時戦場になるかはわかりませんが・・・明日はまだ大丈夫だと思います。それでは良い夢を」

そう言っただけで村瀬は立ち去り扉を静かに閉めて行った。そして閉めた瞬間村瀬の鳴き声が聞こえた。

「お姉さま・・・明日はあなたの仇を・・・この国のためにも・・・負ける訳には行きません」

村瀬はそう言っただけで立ち去った。

「あの人も苦労しているんだ・・・多分この戦の敵国に殺されてしまったんだろう」

そのまま龍騎は寝たが、時を同じくして敵国の大軍が龍騎と村瀬の城に向かって進軍をしていた・・・

〳〵翌朝早朝〳〵

「村瀬様！敵国が攻めて来ました。かなりの数です！軽く壱万、貳万を超す大軍です！ご指示を！」

見張り役の男が叫んだ。予想より早い段階の攻撃に城は困惑した。村瀬が指揮をとる。

「騎兵隊は城門付近に展開。村瀬流の弓隊は後方に配備。落石も城門に用意して。私も出ます。祖国を守るため、皆力を合わせて戦おう！」

村瀬は指示を飛ばした後、急いで龍騎の休む部屋に向かった。

「大神様！この城は襲撃に遭いました。今なら間に合います。城門から逃げてください。敵は大軍です。どうか逃げてください！」

慌ただしい城の様子からこの状況は分かっていた龍騎。準備を手早く済ませる。

「あなたには大変お世話になりました。御武運を祈っています」

龍騎は会釈をして部屋から出た。

「私も大変勉強になりました。機会があればまた会いましょう、お気をつけて」

龍騎は城から出ると城門に向かって走り出した。次々に部隊が展開されていく。城門には巨大な石を落す準備も出来ていた。龍騎の目には敵の大軍が見え始めていた。急いで城を離れる。林に一度身を潜めた直後、戦闘は開始された。突っ込んでくる敵の騎兵隊に対して、まずは落石を投下した。原始的ではあるが効果のある戦略である。相手の兵が潰されていった。それでも数にかなりの差がある。騎兵隊同士の戦いとなった。村瀬たちは後方から弓で的確に援護している。それでも圧倒的な数の差によって村瀬側の兵が押されている。落石も尽きたようだ。

「まだまだ諦めるな！何としても食い止める！」

村瀬が兵に檄を飛ばす。遠い龍騎にまではつきりと聞こえていた。しかし敵国の歩兵も到着してきて戦況はどんどん不利になっていく。敗北は必至かと思えてきた。城門前の騎兵を突破してきた敵の部隊が村瀬たちに突撃していく。最初は何とかさばけたが数が増えてきて、村瀬にも諦めの気持ちが生まれた瞬間――騎兵隊の突撃が止まった。戦が止まったわけではない。誰かが騎兵隊を倒したのである。村瀬が顔を見上げる。そこには――刀を持った武神がいた。

「どうして貴方がこの戦いに？貴方は勝ちました。だから来なくて

もいいのに！」

村瀬が驚きの声を上げる。来るとは夢にも思っていなかった。

「貴方には大きな貸しがある。それに・・・貴方も俺の様に兄弟を無くした存在だから。そして・・・大軍で攻めて来るコイツらに腹がたつたから、武神の力・・・見せてやろうと思つてねっ！」

龍騎、「武神」が吠える。敵はその姿に畏怖したのか、動きが止まる。

「来ないならこっちから行くぞ!!」

龍騎が大軍に斬りかかる。しかしこの戦場の殆どがこの劣勢をたかが一人で覆せるとは思っていなかった。思っていたのは――龍騎本人と、村瀬 栞、この二人である。そして大勢の予想を覆す龍騎と村瀬の戦が始まった。神鳴流の奥義は一对一を想定した技が殆どで、大多数の敵を倒すような奥義は無い。そもそも刀は刀身が短く、乱戦にはあまりむいていないのである。それでも龍騎はやつてのけた。敵の防御の甘さを突いて一撃で相手を倒していく龍騎。足元は倒した兵でいっぱいになっていった。しかしやられっぱなしの相手でもない。龍騎を全方位、8人で囲つていった。そして8人が全員で龍騎にほぼ同時に斬りかかった。誰もが避けられないと思つた次の瞬間――地面に倒れたのは8人の方であった。龍騎は兄から貰つた剣を使い、二刀流にして上段と下段の同時に回転斬りを放ち、それを同時に受け止められる者は誰も居なかった。

「兄さんごめん、少し兄さんの神鳴二刀流と刀使わせてもらうから」  
龍騎はたつた二本の刀で数万の敵に斬りかかった――

第壱拾話 龍騎無双（前編）（後書き）

ついにこの小説も10話経ちました。これも皆さんのお陰です。そろそろアクセス人数が500人に達しそうです。皆さん本当にありがとうございます！これからも応援よろしくお願いします。

第壹拾壹話 龍騎無双（後編）（前書き）

圧倒的な数の差を埋めるため戦場に現れた龍騎。龍騎と村瀬は大軍を押し返すことが出来るのだろうか？

## 第拾巻話 龍騎無双（後編）

兄の刀を一つ借りて、神鳴二刀流で大軍と勝負する決意を固めた龍騎。龍騎の強さに半信半疑の両軍にし返すか龍騎の剣さばきだった。さつきとは違い二刀流になった龍騎は、一人で攻めと守りを両立し、龍騎の後ろに敵兵が立つことは無かった。一方の村瀬も龍騎を援護する。

「村瀬流奥義・・・破魔矢！」

龍騎の頭上を超えて矢が舞う。しかしその矢は急激に向きを変え、一敵軍に向かって突き刺さった。先端に鉄を付けてあるこの特殊な弓の一撃によって、敵軍の真ん中に穴が開いた。龍騎がすかさず穴に飛び込む。真ん中に立った龍騎はまるで鬼神の様な強さを発揮していた。どの方向から敵が来ても龍騎は完璧に対処している。今まさに足を狙った槍が飛ぶ。龍騎は二本の刀を近くにいた敵兵に差し込み、身体を持ち上げ、蹴りでその二人を吹き飛ばした後、刀を抜いて槍の男を切り裂いた。今の龍騎に死角はなかったのである。そして上から鉄の矢が降り注ぐ。龍騎が来てからすざましい速さで敵兵が倒れていく。村瀬の軍も勢いを取り戻してきた。村瀬流の正確な援護に助けられて、龍騎の技はより冴え渡っていった。二刀流は一方の刀で相手の攻撃を受け止めながらも一方の刀で敵を斬るという防御に優れた構えである。しかし今の龍騎は二刀流を防御に殆ど使わず、二本の刀で怒涛の攻撃を見せていた。斬るだけでなく、意表の突きも使って、龍騎は戦場で異常なまでの強さを見せた。返り血で服と刀が赤黒い。その姿は敵も味方も恐れるほどであった。真紅に染まった龍騎が敵の増援へ向かって駆けていく。怒涛の速さで、援軍をあつという間に全滅させた。

「これで終わりか？大したこと無かったな・・・」

龍騎が呟いたのと同時に一人の刀を携えた男が歩いてきた。全力で

斬りに行った龍騎だったが一刀で止められてしまった。かなりの使い手と感じ取った龍騎は一旦距離を置いた。

「我らの要求は唯一つ。貴国の姫と村瀬流の吸収。抵抗するなら全員斬るぞ！」

龍騎を止めた男がこちらに降伏を求めてきた。龍騎も一旦村瀬のところに戻る。

「そんで、どうします？」

龍騎が尋ねる。村瀬が倒すと言ったら自分が迷わず出るつもりだ。

「ここまで来て投降する訳には行きません。大神様・・・我らの代わりにあの男と闘ってくれいでしょうか？」

村瀬が恐る恐る尋ねる。龍騎に断る理由はなかった。

「勿論、僕でいいのなら僕が行きます。行かせてください」

真紅に染まった龍騎が言い放つ。

「では・・・頼みましたよ」

村瀬の言葉を聞いた後、男が城門を超えてこちらに近づいてきた。

「返答を聞かせてもらおうか・・・」

男が馬鹿にしたような声で尋ねる。答えたのは龍騎だった。

「俺達は投降しない・・・俺と一騎打ちして勝ったほうがこの戦の勝者だこれでいいか？」

龍騎が尋ねる男は軽く笑みを見せた。

「面白いじゃないか武神君。いいだろう我が流派 破爪流はそうの力、この丸山 宗吾の力を見せてやろう！」

龍騎も軽く笑っていた。龍騎が声に答える。

「自信あるのか知らないけど、俺は負けないよ。俺は武神で神鳴流の大神 龍騎。あんたに武神の強さ、俺の強さを刻みこんでやるよ」丸山は刀を二本抜いてきた。二刀流である。龍騎は愛刀「龍明」を抜く。

「一本でいいのかな？その二つはお飾・・・」

丸山が言い終わる前に龍騎は斬りかかった。まずは正面に一発。刀を交差させ弾かれる。速度を上げ横に回るも、右手の刀で止めら

れた。刀を右手から左手に持ち替えて、回転斬りするも、丸山に弾かれる。簡単に終わるような相手ではなさそうだ。だがそうでなければわざわざこんな所にまで来た意味が無い。もう一回丸山に飛び込む龍騎。しかし今度は弾かれる前に龍騎が止まった。真下に落ちたのである。

「そんな小細工・・・！」

右の刀で低い姿勢の龍騎を斬りかかる。龍騎は虚蝉の動きで横に急加速した。丸山が刀を振ったときに龍騎は地上にいなかった。

「神鳴流奥義 虚蝉！」

首筋を斬ろうとしたが・・・鈍い音と共に弾かれてしまった。服が裂けそこには首を保護するように鎖帷子くさりかたびらが見えた。

「斬られるのが怖くてそんなもの付けてるのか？」

その時、丸山の構えに異変が起きた。左手の刀を逆刃にして、右手はそのままという奇抜な構えである。

「破爪流奥義 虚無きよむ」

丸山の気配が変わった。龍騎の顔も真剣になる。龍騎は横から斬りつけた。丸山はまず逆刃の刀で龍騎を止め、右手の刀で袈裟斬りを掛けてきた。後ろに下がったため龍騎に傷は無かった。武器が二つあるという利点を生かし攻守一体の技を見せつける丸山。龍騎も刀をもう一本抜き、二刀流にする。二刀流になった龍騎は、守りを捨て、高速の攻撃に全力を注いだ。

「破爪流奥義 曼荼羅まんだらの陣」

丸山は右手の刀も持ち替え両方を逆刃にし、鉄壁の防御の構えをとった。龍騎の攻撃が全て弾かれる。防御だけで言えば煌輝に並ぶかもしれない。龍騎は三本の刀全てを使って、丸山を斬ることにした。まず丸山の前まで突っ込み、二本の刀の間に、左手の刀を叩きつけた。そこに右手の刀も加え、丸山の防御を崩す。その時、左手の刀を捨て両手で握りしめた刀で丸山に袈裟斬りする。だが丸山を斬ることは出来なかった。紙一枚の差で避けられてしまった。丸山が反撃しようとした時に龍騎が奇跡を起こした。刀が届いたのである。



「神鳴流奥義 陰技<sup>いんぎ</sup> 連撃！」

地面に届くまで振り下ろした刀を右手だけで持ち、腕全体を捻った斬り上げが――丸山に届いた。顎を切り裂く一撃である。

「馬鹿なっ！刀が伸びただと！？」

困惑を隠せない丸山。それは見えている村瀬や兵たちも同様だった。斬り上げに使った刀はその勢いを使って、そのまま空中に放り投げた。まば抜刀されていない刀に手をやる。困惑で守備が疎かになっていた丸山に、もう勝ち目はなかった。

「神鳴流奥義 花瓣！！」

刀の柄を丸山の腹に当て、そこに生まれた隙に、振り上げた刀の袈裟斬りが入った。

「馬鹿・・・な・・・この・・・俺・・・が・・・」

そう言つて丸山は崩れ去った。龍騎の勝ちである。龍騎も疲れたのか地面に寝そべる。そしてこの戦いを見た村瀬は決心する。この人と共に旅をしよう――

第壱拾壱話 龍騎無双（後編）（後書き）

今回は何時もよりちょっと長めでしたね。どうして龍騎の刀は届いたのか？これは次回紹介しますので見てみてください。意外と簡単にできますよ。

次回からは龍騎の一人旅に幕を閉じ、村瀬との二人旅・・・かもしれませんのでまだまだ応援宜しくお願いします

先日この小説のアクセス数が500人を超えました。本当にありがとうございますこの作品を書き続けられているのも皆さんのお陰です。これからも応援宜しくお願い致します。

## 第壹拾貳話 龍騎の二人旅（前書き）

村瀬の軍を救い、強敵丸山も倒した龍騎。村瀬は龍騎と共に旅をする決意を固めた――

## 第拾貳話 龍騎の二人旅

大軍を下し、破爪流の丸山も倒した龍騎の姿は返り血で赤黒く刀も赤黒かった。その姿は敵の軍は勿論、村瀬の兵もその姿に畏怖していた。

「今ので最後みたいです。終わりましたよー」

龍騎が村瀬に告げる。城の民も、兵も龍騎のもとに詰め寄る。

「助けていただきありがとうございます、これでこの城に平和が訪れます。ところで一つ聞きたいことがあります、どうしてあの刀は届いたのですか？」

刀が伸びたというのは龍騎が繰り出した神鳴流奥義 陰技 連撃の事である。誰が観ても刀が伸びたように見えた。そこで龍騎が種明かしをするように淡々と答えた。

「あんなの誰でもすぐ出来ますよ、まず右手を振り下ろしてください」

言われて村瀬もやってみる。龍騎の説明は続く。

「そして振り下ろした手の親指は上を向いてますね？それを捻って下に向けます。その時首も正面から少し左に向けてくださいすると・

・・」

村瀬が驚く、手が少し伸びたからだ

「凄い！本当に腕が少しだけ伸びた・・・どうしてですか？」

驚きを隠せない村瀬。こんなに簡単に間合いが伸びるとは思っていなかった。

「捻ることで肩甲骨が少しずつれるんです。だから腕が伸びて間合いが増すんです。一度上から大きく斬った後、追撃のためにこの技を使うんです」

だから丸山の時も届かなかったはずの刀が届いたのかと感心した。

「教えて頂き有難うございます、そしてこの城を救っていただき有

難うございます」

村瀬が龍騎に感謝の意を述べる。他の民も龍騎を取り囲み歓声を上げる。龍騎も笑みを浮かべる。自分の戦いで感謝されるのは久しぶりで、龍騎に笑みが浮かぶ。いきなり村瀬が真剣な面持ちで龍騎に話しかけて来た。次の一言はここにいる全ての人の予想を裏切るものだった。

「あの・・・私も、貴方の旅のお供になってもよろしいでしょうか？」

何と、村瀬が龍騎と旅をしたいと申し出てきた。龍騎も驚きを隠せない。

「お、俺と旅？貴方には、この城の政治をしなければいけないのでは？」

龍騎が聞き返す。当然の事である。城の姫が旅をするなんてあり得ないことである。しかも兄弟がいないのだから尚更である。

「この城には私よりも優れた人材が沢山います。私は貴方と旅を試みたいのです！」

誰もが言葉を失った。そこで城から一人の男性が出てきた。

「貴方がこの戦を救った、英雄・・・有難うございます」

正装をした男にお礼を言われて困惑する龍騎。訳がわからない。

「あなたが・・・この城主ですか？」

これしか龍騎に考えられない。予想は的中した。

「はい、恥ずかしながら・・・私はこの戦で何も出来なかった・・・恐怖で娘に任せっきりになってしまいました・・・」

城主が申し訳なさそうに龍騎と、村瀬に話しかける。村瀬が父に自分の思いを伝えた。

「父上！お願いがあります。私はこの方と共に旅に出て様々な事を学び、我らの力で城を守るようになりたいのです！どうかお願いします！」

男は笑顔を浮かべた。

「私はそれでも構わない。只龍騎君が・・・」

龍騎は城主の不安に笑って返した。

「いえいえ、僕は大丈夫ですよ？貴方達が大丈夫なら・・・」

村瀬が嬉しそうに笑顔を浮かべた。初めて見る笑顔である。龍騎は自分の頬が熱くなるのを感じていた。こんな事は久しぶりである。

「では、娘を・・・お願いします。ですが今日はお疲れでしょう、ゆっくりお休みください」

龍騎の顔が笑顔から真剣な顔になる。

「はい、生命に代えても・・・必ず彼女をお守りします。」

〃〃翌日〃〃

「では、参りましょうか」

旅支度を終えた村瀬が龍騎に尋ねる。龍騎も軽く答えた。

「ええ、そろそろ行きますよ」

赤黒かった服と刀は、丁寧に整理され綺麗な色に戻っていた。村瀬が不在の間は政治は父や、優秀な部下に任せることになった。

「私の事、姫って呼ばないでくださいね？」

村瀬が笑顔で話しかける。龍騎がキョトンとする。

「どうしてですか？貴方は姫ですし・・・」

そういった瞬間、村瀬が少し不機嫌そうな顔をした。

「旅に出ているから姫でも何でもありません！」

そう言われればそうかもしれない。けどそうになると扱いに困ってしまう。幼い頃から神鳴の子として武の鍛錬に励み続けた龍騎はいくら強くても、色恋沙汰は苦手だった。

「別に、何でもいいですよ？姫以外なら」

笑顔の村瀬が言う。表情に出さないようにしてはいるが内心は相当照れている龍騎。

「じゃ、じゃあ・・・村瀬とか？」

顔に出さなくても言葉で龍騎の動揺は手に取るように分かった。

「それでもいいですよ？龍騎」

村瀬が小悪魔の様な表情で龍騎に話す。龍騎は少し倒れそうになっ

たが何とか城門まで辿り着いた。

「では、行つて参ります父上」

「気をつけてな栞」

親子がしばらく出来ない挨拶を交わす。こうして二人は村瀬の城を後にし、二人で各地を巡る旅に出るのであった――

## 第壱拾貳話 龍騎の二人旅（後書き）

今回は、正直いつもとは違う感じですね。特に最後の方は全く違いましたね。戦いこそこの物語の大事な場面ですので次回はちゃんと龍騎に戦わせます。

ちなみに二人旅と行っても殆ど村瀬に出番は与えるつもりはありません。たまに出るぐらいです。そんなわけでこれからよろしくお願いします。



## 第壹拾参話 龍騎の激昂（前書き）

I 村瀬との二人旅を始めた龍騎、これから二人を待っているものは――

## 第卅拾参話 龍騎の激昂

二人旅を初めてから二週間が経っていた。この二週間は強敵にも会わずに、平穩な旅となっていた。しかしこの間村瀬に言われたことが一つ気がかりだった。

「この辺りには薙刀なぎなたを持った流派が集団で旅人を襲っていると聞きます。気をつけてくださいね。」

薙刀とは長い柄に刀のような刃を付けた武器である。刀より間合いがとても長いので、正直龍騎には不利な戦いになる。それでもいざとなつては絶対に負ける訳にはいかない。気を引き締めて歩いていった。その時前から五人の男たちがこちらへ向かつてきた。武器を持つてゐるのはよく分からない。男たちとすれ違つたが特に何かをされたわけでもない。普通に去つていこうとしたその時――龍騎の刀が動いた。男の一人が噂の薙刀を持っていた

「アンタたち、俺らを後ろから斬ろうとしたの？ そんなんで俺を殺せろと思うなよ」

龍騎が冷たく言い放つ。男は軽い舌打ちをして、軽く後ろに下がった。

「流石ですね、武神君。姫様と一緒にだなんて邪魔でしたか？」

男は軽く笑いながら話しかけてきた。龍騎を逆撫でするような言い方だった。

「お前ら何流？ 一番強いのは誰？」

無視して龍騎は尋ねた。真ん中の男が答える。

「俺達は総亥流そうがい。俺は頭首の小林 裕馬ゆうま」

龍騎から汗が溢れる。暑いわけではない。小林から放たれる研ぎ澄まされた「気」を感じ汗が出た。こんな事は普通ない。今まで戦つてきた相手にも感じるものはあつた。だがこの男の気は今まで見たことのない純粹な「殺気」だった。

「もしかして裕馬さんに怖じ気づいた？　そういえばお兄さんは残念だったね」

さっきの軽々しい男がまた龍騎の神経を逆撫でする。しかも今度は煌輝のことを馬鹿にした。ゆっくり目を見開いた龍騎の目は本氣の眼だった。小林だけでなく龍騎からもかなりの殺氣が放たれた。今度は小林が汗をかく。それが分らないのか軽々しい男は続けて話してきた。

「そんなに怖い目をしなくてもどうせ兄ちゃんも大したことー」男の声が聞こえなくなった。男の首は吹き飛んでいた。龍騎が斬り飛ばしていた。

「いい加減にしろよ、兄さんの事を侮辱するなこの雑魚が」

それを見ていた村瀬も龍騎の殺氣を感じていた、怖くなるぐらいに。

「あんな龍騎初めて見た。怖いけど・・・凄い」

龍騎は真っ直ぐ小林を睨みつける。他の男には龍騎の怖さが分かっていなかった。

「こんな奴にびびらなくてもいいじゃないですか、早く倒しちゃってくださいよ」

小林は軽く怒ったような口調で他の男に声を掛ける。

「お前ら・・・あの男から何も感じないのか？　だったら下がってるだけ邪魔だ」

龍騎と小林の殺氣が一段と激しくなる。男たちは渋々下がって行った。

「俺は神鳴流の大神　龍騎だ・・・行くぞ」

村瀬は固唾を飲んで見ていた。その瞬間龍騎が斬りかかる。二人の戦いが始まった。小林も素早く薙刀を抜き龍騎の刀を受け止める。当たった瞬間一度龍騎は後ろに下がり距離を置いた。反動を活かしてもう一度小林に向かって加速する。小林は今度は突きを見せてきた。その瞬間――龍騎が消える。

「神鳴流奥義　麒麟っ！」

薙刀の真下に潜る龍騎。それを見た瞬間小林は薙刀を地面にまで下

げた。龍騎は刀を薙刀に当てながら小林まで進む、止まる気など無い。小林が力任せに薙刀を押しこんで龍騎の刀ごと潰そうとする。小林の薙刀が地面についたとき龍騎はまた小林から消えていた。小林は少しも同揺せず薙刀の柄を背後まで一直線に下げた。その柄は刀を持っていた右手に当たり刀は空を舞った。しかしここで引くわけにはいかない。別な刀を左手で持って斬ろうとしたが小林自身が半回転しながら斬りかかってきたのでこれ以上攻撃できなかった。薙刀は刀身が長いだけあって、様々な攻撃が出来る。そもそも間合いが長いので懐に入ること困難である。だからと闘って勝てる相手ではない。地面に転がっていた刀を拾い、一気に決めるにかかる。と決めた龍騎。小林を殺すことに少しの迷いも躊躇い（ためらい）も感じない。決めに走った龍騎は愛刀の龍明りゅうめいを持って小林に加速する。小林は薙刀を地面にこすらせながら龍騎に反撃する。刀は下段はあまり得意ではないが、三本の刀を持つ龍騎の勢いはそれだけでは止められなかった。刀を薙刀に当てながら走る龍騎。一気に薙刀を押しこんでからその刀を放し、一二本目の刀で小林の心臓に突きを掛けた。しかし小林も強者。薙刀を弾かれた瞬間、宙に舞いながら回転して龍騎の突きを払った。

「蒼風滅相撃！！」  
そうふうめつそうげき

刀を弾かれただけでなく、上半身も刀は斬り裂いた。しかしそんなこと少しも龍騎は気にしていなかった。龍騎が吠える、そして神鳴の奥義を見せる――

「こんな傷ごときで！！喰らえよ神鳴流奥義 御の型 猛雷鎚！！」  
たけいかずち

三本目の刀を抜き、両手で握り締め小林の頭上まで刀を振り上げる。しかしそのままでは薙刀に弾かれる。そこから龍騎の猛雷鎚が始まった。最初に少し斜めから切り始めた龍騎。それでも薙刀に簡単に弾かれてしまう。そこで龍騎はいきなり刀の鐔つばに近い左手を突然離し右手を滑らせ、さっきまで左手のあった場所に右手を、左手があった場所に右手を移動させた。すると最初小林の右目から入ってい

た刀が逆を向き、右目から左目に抜ける向きに一瞬で刀が逆を向いた――その動きはまさに雷鎚のような動きだった。小林が反応する前に、龍騎の刀が入っていた。龍騎はその勢いを殺さず小林の後ろに回り込む。

「これが神鳴の――兄さんの力だ！！！うっかけ虚陽！！！！」

龍騎が三本目の刀を小林に放つ。刀は小林の背中に刺さり、小林の身体を貫通した――そのまま小林は地面に倒れた。龍騎の勝ちである。村瀬が駆け寄ってきた。

「とっても強くて格好良かったよ！すごいねあの猛雷鎚、どうして刀が逆向くの？」

小林を倒した瞬間龍騎はいつもの顔に戻っていた。

「今日の戦いは調子が良かったな。猛雷鎚も決まったし。それは今度話すよ、今は少し疲れたから休ませて」

神鳴の技を確実に会得し、高みに登っていく龍騎。どこまで強くなるのか――

## 第壱拾参話 龍騎の激昂（後書き）

今回は薙刀の総亥流との対決です。煌輝を馬鹿にされ全開全力の龍騎はいかがでしたか？最初に比べ文章の書き方も上手くなってきたと思いますが、まだまだ未熟なのでこれからも頑張りたいと思います。

この小説もたくさんの人に見ていただけて本当に嬉しいです。これからも応援宜しくお願い致します。

第壱拾四話 永久の好敵手（前編）（前書き）

煌輝を侮辱されたことへの怒りで総亥流を瞬く間に潰した龍騎。次に彼らを待ち受けているものは―― 次

## 第拾四話 永久の好敵手（前編）

「どうしてあの時刀は曲がったんですか？」

村瀬が興味深そうに尋ねる。龍騎としてはついさつき戦いが終わったばかりなのでそつとしておいて欲しかったがそういう訳にも行かなさそうだ。しょうがなさそうに龍騎が答える。

「あれは、まず左手を刀の鰐に近づけて持って右手をその下に付ける。そうするとこつちから見ると刀は左に傾くでしょ？つまり相手の右目から入って左に抜けていく軌道になる。だけど斬ろうとした瞬間に、手を持ち帰ると？」

村瀬が今度は右手を鰐に近づけ左手を下げる。すると刀はさつきとは逆に傾いた。何故か村瀬が喜ぶ。「凄い凄い！刀が逆を向いたね！これを瞬時にやって刀の軌道を変化させて相手を斬ったんだね！何故そこまで喜ぶのか龍騎にはいまいち分からなかったが、龍騎が話を続ける

「斬りながら瞬時に手を持ち帰るのは大変なんだから？簡単にできると思ったら大間違いだよ。そしてこの軌道の変化がまるで「雷鎚」のように見えたからこの技は猛雷鎚って言うようになったんだ」相手にとっては目の前でいきなり向きが変わる刀を止めるのは至難の業であろつ。そういう技が多いからこそ神鳴流は名家と言われるのである。

「それにしても今日の龍騎はちよつと怖かった。何か体中から殺気みたいな気迫みたいなのが溢れてたよ？あと相手の小林って人も」龍騎自身も今日は何時もと勝手が違う気がしていた。途中のことはあまり覚えてない。普段はこんなことは無かった。煌輝と戦った時も、ほぼ全ての動きを記憶している。なのにさっきのは戦いの内容をほとんど覚えていない。最後に無心で猛雷鎚と虚陽を放ったことしか覚えていなかった。

「なんかあいつらに兄さんのこと馬鹿にされてそつからあいつらに



腹立って気づいたら相手は皆死んでたよ、調子は良かったけど何か俺自身は変だったな」

龍騎が振り返って思い出す。そしてふと思い出したことを村瀬にも伝える。

「俺の爺ちゃんが昔言ってたけど、強くなっていくとその人からは自然に気迫に満ちた何かが出るようになるんだって、けどその気迫は同じ領域の強さに達しないと見えないんだって。だからその気迫が見えない時点でその人は大したことないらしいよ。栞は見えてたから結構強いってことだね」

村瀬がわざと不機嫌そうな顔をする。村瀬が反論してきた。

「私は結構じゃなくてかなり強い！それでも名門の村瀬流の頭首ですよ？それを結構って・・・私とあなたは共に人生を歩く関係のはず・・・それなのにどうしてそんなひどいことを言うの？」

若干村瀬の演技が入ってたので途中からは殆ど聞いてない。そこに龍騎の体にしびれる何かが走った。

「気をつけて栞。相当の強さを持った奴が来る」

龍騎が言い終わると同時に、龍騎や村瀬と年代の男が茂みから出てきた。ただ歩いてきただけなのに感じる気迫。村瀬もそれを感じ取った。その男が口を開く。

「どうも、蘇澳流そおうの安西やすにし 蒼真そうまと言います。あなたにお願いがあるんですけど俺と・・・ここで戦って欲しい。」

圧力に潰されそうになりながら龍騎が返答する。

「別に断る理由もない・・・俺は神鳴流の大神 龍騎ここでいいだろ？」

さっき何人が斬った後だったが無もないここは一騎打ちには丁度いい。

「ええ・・・構いませんなら早速始めましょうか・・・」

安西が抜いたのは龍騎と同じ刀。それも一刀流だった。それを見た瞬間龍騎の心に火がつく。同じ刀相手だったら負けるわけには行かない。気持ちを高める。両者からは、溢れ出る殺気が出されていた。

どちらもかなりの使い手である。軽く見合つた瞬間――龍騎が飛び出すまずは奥義を出さずに、軽く斬り合いが始まる。安西も派手な動きはなく堅実な刀さばきを見せていた。戦いはまだ始まつたばかり、そしてこの二人はこの後幾度も刃を交えるのであつた――

第壱拾四話 永久の好敵手（前編）（後書き）

結局説明だけで終わってしまいました。すみません次回は一気に決着つけます。けどこれでどちらかが死ぬことは・・・無いです。もうちよい二人には活躍してもらいます。

しばらく書くのが遅くなってすみませんでした。楽しみにしていた方には本当に申し訳ありません。ぜひこれからも応援よろしく願います。

第壱拾五話 永久の好敵手（後編）（前書き）

新たに龍騎の前に現れた蘇澳流の安西。刀対刀の激闘はどちらが制するのだろうか。

## 第拾五話 永久の好敵手（後編）

突如現れた蘇澳流の安西蒼真。龍騎以上の圧力を放って龍騎と斬り合いを見せていた。武器はお互いに刀でどちらも譲るわけにはいかない戦いだった。どちらも攻守を入れ替えながら刀をぶつけ合うが、実力が拮抗してるので中々決めに行けない。

「世の中にはまだまだ強い奴がいるんだな・・・」

龍騎は独語しながら安西に攻めこむ。しかし全て躲され意味のない攻撃となってしまう。龍騎は軽く刀を当てたあと虚蝉の動きで後ろに回ろうとするが先に後ろを向いた安西に止められる。お互いが軽く後ろに下がっていた。

「噂の武神だったが・・・ここまでやるとは思っていなかった正直予想外だな」

今度は安西が独語する。龍騎の背面からの攻めを止めた瞬間、次は安西が攻撃してきた。刀を細かく振り、手数で勝負する安西。だが龍騎もそれらを的確に受け止めていた。

「このままじゃ何時まで経っても終わらねえ、少し奥義使うか・・・」

龍騎がそう考えていたとき、安西も同じ事を考えていたことは龍騎には知るよしもなかった。しかしここからが真の勝負となった。二人の気迫がさつきより大きくなる。それは村瀬を感じ取っていた。「急に感じが変わった・・・多分ここからが本当の勝負になっていくんだと思う。お願いだから死なないでー！あなたに死なれたら私はー」

龍騎がどの奥義を使うか考えていた頃安西が先に攻めてきた。手数の多い攻撃から急に突きが飛び出してくる。後ろに下がって避けようとしたが間に合わなかった。安西の刀が伸びたのである。あの神鳴流奥義のように。

「蘇澳流奥義 紅煉くれん！」

若干伸びた刀に鼻の上を突かれる。考える間もなく横を向いた龍騎は安西と同じやり方で刀を伸ばし反撃しようとする。しかしその時にはすでに遅かった。

「当たらなかつたか・・・それにしてもあの技は連撃！？そんな事考えてる場合でも無いかっ」

龍騎が安西に向けて走りこむ。龍騎が血を出したことに見て入れない村瀬は声を出しそうになる。

「そんな・・・龍騎の顔に傷を入れるなんて！もしかしたら・・・」  
最悪のことを考えてしまった村瀬。村瀬も何度も戦いを重ねてるので簡単に想像出来てしまった。突っ込んでくる龍騎に対して安西は刀を突き刺そうとする。その瞬間龍騎は急加速する。

「神鳴流奥義 麒麟！」

頭を地面にかする所まで下げ、攻撃をかわして一気に加速する龍騎。龍騎の下からの切り上げに安西は簡単に対応した。

「そんな疾さだけの攻撃・・・当たるわけがない」

一気に龍騎の真横まで移動する安西。一度縦に加速すると横には中々向けない。間に合わなかった。左の脇を斬られる。続けざまに背中も斬られた。その後は何とか避けたが酷い出血である。それなのに安西は無傷であった。

「ここまで俺が追い詰められるなんて・・・正直俺を追い詰められるのは兄さんだけだと思ってた」

その時の村瀬は今にも泣き出しそうであった。膝の力が抜ける。地面に崩れてしまった。安西は龍騎に一切情けをかけずに斬ろうとする。受け止めながら体勢を立て直す龍騎だが今にも崩れそうである。左の脇を斬られたため左手では刀を持つことは難しくなった。

「決まるか分からないけど、あれを使ってみるか・・・」

考えは決まったが攻撃には中々移れない龍騎。そこで一か八かもう一度加速を付けて・・・

「神鳴流奥義 麒麟だ！今度こそ！！」

攻撃を躲す前から加速を始めた龍騎。安西と村瀬から見ればそれは

自殺行為だった。しかし今回の攻め方は違った。加速の途中で一本目を足に向かつて投げた龍騎。安西は軽く上に跳んで躲す。一気に間合いに飛び込む龍騎。何とか引つかかってくれたと安心していた。「しつこいな・・・終わりだ！」

上から安西の刀が振り下ろされる。龍騎は別な刀を抜いて上を見る。龍騎の反撃が始まった。

「勝負はこっからだ！神鳴流奥義 六の型 朱雀！」すいこく

龍騎は刀を安西の刀に当てる途中傷を負った左手で右手を思いっきり弾いた。すると――刀は急加速し威力も上がった。その勢いは安西の刀を吹き飛ばしていた。

「馬鹿な！刀が飛ばされるなんて・・・」

安西も動揺を隠せない。村瀬も目を見開いた。

「龍騎が反撃する！これなら・・・」

安西が別な刀を抜く間に龍騎は全身に力を込め縦に安西を斬った。今度は安西から血がでる。再度睨み合う二人。そしてまた斬りかかろうとした瞬間――

「これ以上はやめて！二人とも傷だらけだから・・・」

龍騎と安西の間に矢が降ってくる。村瀬流奥義の破魔矢だと直感する。

「二人ともこのままだと死ぬからもうやめてよ！」

無言になる龍騎と安西。村瀬が泣きながら話す。

「もし、龍騎に死なれたら・・・私は・・・だから・・・今日は身体を休めて・・・」

それを見て聞いた安西は刀をしまう。それにつられて龍騎も刀を戻す。村瀬のところに駆け寄った。

「ごめん、癪ちよつと無理しすぎた。今日はもうやめるよ」

安西が後ろを向き歩き出そうとする。龍騎が呼び止めた。

「ちよつと待ってくれ。安西・・・いや蒼真強かったよまた会おうな」

「お前こそ、龍騎お前を倒すのは俺だ。それまで負けるなよ次は万

全の状態で戦いたい。またな」

そう言うと安西はどこかに歩いていった。

「栞ごめんな、俺は死んでないんだから泣くなって」

ようやく笑顔を見せた村瀬。龍騎の顔にも笑みが浮かぶ。

「もう無理したら駄目だからね？約束だよ？死なないでね・・・」

今までは一人だったからこんな心配してくれる人はいなかった。だが今は心配してくれる人がいる。これはとても嬉しいことだと龍騎は思った。その為にも更に上を目指そうと決意した――



第壱拾五話 永久の好敵手（後編）（後書き）

これで一応龍騎対蒼真は終わりです。まだこの二人は戦いますが・

・

そして強くなる龍騎と徐々に近づく龍騎と村瀬の距離にもご注目下さい。

この小説も何百人の人に見てもらってとても嬉しいです。これから  
も応援宜しくお願いします。

## 第壱拾六話 龍騎の恋心（前書き）

辛くも蒼真を退けた龍騎。その影には村瀬の説得があったからだっ  
た。龍騎は自分が村瀬に抱き始めた感情に気づくことが出来るのか

――

## 第壱拾六話 龍騎の恋心

「全く、こんなに怪我して死んだらどうするんですか？」

村瀬に怒られながらも包帯を巻いてもらっていた龍騎。ここまで自分の身を案じてくれる人がいるなんて今までは気付かなかった。一人旅をしてきたから誰とも話さず、怪我をしても一人で処置をしてきた。二人旅もいいものだとの頃思うようになってきていた。そしてその思いは仲間だけでなく、それ以上の思いであることを龍騎には未だ分からなかった。

「うん、もういいよありがとう。まあ俺は負けなと思ってたから・・・ちよつと無茶を・・・」

初めて顔を見たときから、可愛いとは思っていたが最近の前より愛らしく見える。自分の誇りのために戦ってきた頃とは違い村瀬のためにも負けられなくなった龍騎。

「龍騎どうしたの？ちよつと顔が赤いよ？熱かな？」

どうやら少し顔が赤くなっていたらしい。心配をかけないために笑って誤魔化する。

「そう？気のせいじゃない？俺は健康だよ？」

その時村瀬が額を近づけ龍騎の額と重ねる。龍騎にとってはこっちの方が熱を出しそうだったが何とか我慢した。何故こんな気持ちになるのか龍騎にはわからない。何故なら小さい頃から武芸の修行に打ち込んでいた龍騎はそんな事を考える余裕など無かった。当然恋などしたことがない。そんなことを考えていると村瀬が龍騎の考えていることがわかったのか質問をしてきた。

「龍騎って好きになった女の子っていないの？」

いきなりの質問に少し戸惑うが、龍騎は本当のことを答えた。

「俺は小さい頃からとにかく刀を持って鍛錬を積んできたから・・・そういう感情がどういのかはいまいち分からないんだよ・・・強いて言えばこの刀が恋人かな・・・」

最後のは冗談で言っただつもりだが村瀬に冗談は通じなかつたらしく「龍騎・・・可哀想にね」

と冷たく言われてしまった。龍騎が必死に説明する。

「栞、最後のは冗談だからな？あんまり真に受けるなよ？」

いつの間にか村瀬のことを栞と呼ぶようになった龍騎。そして弁解してみたがもう遅いらしい。それにしてもいきなり村瀬がこんな事を聴くのは珍しい。そこで龍騎も村瀬と同じ事を尋ねた。

「そういう栞は・・・いるの？」

村瀬が少し驚きながら否定した。

「え！この私にはいませんよ！私も小さい頃から矢の鍛錬に忙しかつたので」

嘘を付いたが何とかばれなかった。

「それは貴方です。なんて言えるわけがない・・・」

そう心のなかで呟いた村瀬。昔龍騎の戦いを観戦した時から、彼に惹かれていた。そんな彼が偶然私の城にやってきた。そして城の危機を救ってくれた。さらに今は自分と旅をしているー今度は村瀬が考え込んだ。正直村瀬もこういう事はよく分らない。龍騎にも言っただが自分も小さい頃から矢の鍛錬をしてきたのでそういう事を考える暇はあまりなかった。それでも龍騎に憧れ今日まで頑張ってきた。

「そっか栞もいないのか」

龍騎が少し残念そうに言う。そして龍騎は村瀬に聞いてみる。答えは出ないかもしれないが

「なあ栞、人を好きになるってどういう事だと思う？」

村瀬がびっくりする。いきなりそんな事を聞かれるなんて思ってもいなかった。自分の答えに不安はあるが一応答えてみる。

「！いきなりどうしたんですか？えっと多分それは・・・その人の事をずっと考えていたり、その人の事で悩んだり、そして・・・その人の事を自分より大切に思っただけですかね？」

村瀬に言われて気づいた気がする。最近自分の技のことより村瀬

のことを考えているし、村瀬への感情で悩みもした。そして・・・村瀬の事を大切にしようとも思っている。つまりこれが――

「急にこんな事を聞くななんてどうしたの？もしかして誰かのことが――」

「栞、聞いて欲しいことがある」

村瀬が言い終わるより早く龍騎が喋っていた。この想いは今すぐ伝えようと思ったからだ。村瀬も龍騎を見つめる。

「俺は今まで自分の為に戦い続けてきた。だけどこれからは違う、今日まで俺を支え続けてくれていた人のため――栞のために戦う。栞、好きだ。」

龍騎の突然の告白に顔が真っ赤になる村瀬。当然龍騎の顔を赤かった。そしてこの言葉は栞に取って素直に嬉しかった。

「はい！私も貴方のことが――龍騎のことが大好きです！」

今まで見たこともないような笑顔を見せられ本当に倒れそうになったがかるうじて耐えた。

「もう、無理しないでね？負けてもいいけど死ぬのは絶対駄目だからね？」

そんな事を言われながら抱きつかれた。啞然とした龍騎だが、村瀬を抱き返す。

「ああ、分かった。でも俺は――必ず勝つ。栞のためにもね」

こうしてこれからの二人は歩くときは必ず手を繋ぐようになった。

刀だけを握り続けた少年の心に、「愛」という感情が芽生えた日だった――

## 第壱拾六話 龍騎の恋心（後書き）

今回は戦闘はお休みして、二人の会話に集中させました。たまにはこういう話もいいんじゃないかと思えます。これからは旅の仲間ではなく、恋人となった二人の活躍をこれからも応援宜しくお願いします。

第壱拾七話 村瀬の嫉妬（前書き）

村瀬に自分の想いを伝え、恋人となった龍騎。次はどんな敵と戦うのか――

## 第壱拾七話 村瀬の嫉妬

とある草原を二人が手をつないでゆつくり歩く。一步一步踏みしめるように。この二人はもちろん龍騎と村瀬である。龍騎が告白してからは必ず手をつないで歩くようになった。特に龍騎は武神だけあって、町では色々言われるが気にしないことにしてる。ここまでの道中で何人かの人間と戦っているが龍騎の動きは驚異的であった。もともとあつた疾さにより磨きがかかり、ろくに姿を捉えることも出来ずに斬られていく。多分これが「愛の力」なんだろうと龍騎は確信していた。

「龍騎、もう少しで次の街ですよ」

そんな事を考えていると村瀬から声をかけられる。龍騎も微笑みながら返す。

「うん、疲れたから寄っていくしょ？」

「出来れば寄りたいかな・・・」

「分かった、じゃあ寄ろうか」

守りたい人がいるとここまで人は変わるものかと龍騎は思っていた。昔ならこんな事は絶対になかったと思う。技にも磨きがかかってきたし最近は充実していると思っていた。

「中々広い街ですね」

「結構大きいね」

当然二人は街中でも手をつなぐ。龍騎は有名人なのですぐに人だかりができる。周りから色々言われてるが全て無視し街を歩いて回った。すると突然後ろから声をかけられる。無視しようと思ったが中々無視できない内容のものだった。

「貴方、今の武神でしょ？だったらあたしと戦いなさい！逃げるのは許さないんだから！」

「いきなり何なんだ？こんな所で戦うのかよー」



そう言つて声の方向に振り返るとそこには、髪は村瀬と対照的に短く切つた女の子が立っていた。当然栞も可愛いがこっちはこっちで中々可愛いと思う。つい見とれてしまった。

「私の名前は佐藤 美穂<sup>みほ</sup>！ 流派は、棍術<sup>こんじゆつ</sup>の饗饌流<sup>きやうせん</sup>だ！」

髪の色は橙の綺麗な髪だった。見とれていたが我に返り栞に戦いの許可を取った。

「栞？あの娘と・・・戦つてきていい？その間街を見ていればー」

「戦つてくれば？私はそこら辺を歩いてるし・・・」

「もしかして栞・・・怒ってます？」

「別に・・・早く戦つてくればいいじゃんっ！」

そう言つと村瀬は何処かに行つてしまった。龍騎は反省しながらも、佐藤美穂と名乗つた人物を見つめた。戦うという意味表示である。

「わかつた、戦つてやる・・・俺は神鳴流の大神 龍騎だ」

「場所は此処でいいな？一対一の真剣勝負、本気を出さなかつたら許さないからね！」

「分かつた、かかつてこいよ・・・」

龍騎の身体から気迫が溢れてくる。それは佐藤も同じだった、次の瞬間二人は真剣勝負を始めた。

その頃村瀬は一人寂しく街を歩いていた。

「龍騎は私より、あの娘が好きなのかな・・・そうだったら哀しいな・・・」

あの時、龍騎は絶対にあの娘に見とれていたと思う。気にし過ぎかもしれないけど、多分そんな気がしたそしてそれはとても寂しかった。

「これが、嫉妬つていう気持ちなのかな・・・」

今まで自分が味わつたことのない感情に気づく。言葉では説明できないような、胸を突くような痛みだった。それだけ自分が、彼のことを好きなんだと思う。同時にさっきの自分の言動を反省する。

「さっきは龍騎に冷たくしちゃつたな・・・怒つてないといいけど。」

今から見に行こうかな・・・」

村瀬がこんな事を考えている間、龍騎は苦戦していた。棍と戦うのはこれが初めてで不規則な動きに戸惑っていた。一度刀にぶつけた後背中へ回して逆方向から攻撃されるなど、刀や槍にはない動きを見せていた。棍という武器は、棒のような形状をしている。刃はないため、基本的に突きで攻撃する。また刀より太いため正面から当たると簡単に刀が壊れそうで迂闊には攻撃できない。槍よりも厄介かもしれない。そしてもうひとつの理由が村瀬のことである。自分のことを嫌ってしまったのではないかと考えていると反応も遅くなってしまう。そして自分の甘さを後悔することになる。

「饗饌流奥義 無双連弾！」  
むそうれんだん

佐藤が踏み込みながら棍を無数に突いてくる。最初のうちはかわし続けていたが徐々にかわせなくなる。そしてついに腹に重たい一撃が入る。そのあとは動けず10発ほど喰らった。内臓が押され潰されそうになる。更に佐藤は重たい一撃を浴びせた――

「饗饌流奥義 天穴！」  
てんけつ これで決めるよ！！」

一度棍を引いて構える佐藤。龍騎には構える力は残されていないかった。佐藤は棍を放つと同時に棍を螺旋状に回転させ、龍騎の腹でねじの様に回転した。龍騎が口から血を吐く。あまりの衝撃に後ろに吹き飛ばされた。

「もうやめとく？これがあんたの全力とは思えないけど・・・ちゃんと本気を出さないよ！」

余裕の佐藤の声を聞いてると自分に腹がたってきた。余計なことは考えず今は本気であの女を殺そう。そう決めるとゆっくりとだが龍騎は立ち上がった。

「ここからが本番だ・・・神鳴流の力にひれ伏しな！」  
そうは言ったものの内蔵にそうとうの傷を負ったため何時ものような疾さは出せない。佐藤が来るのを待って反撃を試みる。しかし刀では棍の間合いに勝てない。そこで龍騎は、あの男を撃退した時と

同じやり方で倒そうと考えた。まずは下段をしつこく攻める。防御に疲れたのか、佐藤は後ろにさがり、棍を自分の頭上に持ち上げ振り回す。

「饗饌流奥義 地碎衝ちさいしょう！これで終わらせるんだから！」

頭上で棍を高速回転させその勢いを活かして龍騎に叩きつけてきた。しかし龍騎もここで引くわけにわ行かない。神鳴流奥義を遂に発動させる。

「弾き返してやる・・・神鳴流奥義 朱雀！」

空いている手で刀を握っている手を弾き、剣速を増加させ、相手の武器を弾く技。しかしまだ威力が足りない佐藤も勝利を確信する。

「そんなんじや地碎衝は弾けない！私の勝ち！！」

そこで龍騎が朱雀に更に奥義を上乗せする――

「誰がこれで終わりって言った！神鳴流奥義 七の型 八咫鏡やたのかがみつ！  
！」

朱雀に使った左手をもう一度刀のところへ持つて行き、右手と合わせて刀をねじの様に回転させた。

「これは・・・天穴と同じ動き？」

佐藤が驚く、龍騎には打ち勝つ自信があった。

「この剣速と、回転なら！！」

鈍い音がして、龍騎は仰け反った。しかし、佐藤もまた棍を弾かれた。佐藤は驚きを隠せない。

「棍が刀に負けた！？」

刀を構え直しながら、佐藤に刀を向ける。そして喉元で刀を止めた。

「まだ、やるのか・・・」

龍騎が冷たく言い放つ。当然佐藤に余裕はなかった。棍を地面に置く。

「その・・・降参したわけじゃないんだからね！えっと・・・疲れたからやめるだけなの！アンタのことが強いだなんて・・・思っていないんだからっ！」

思わず啞然とする龍騎。どうやらこの娘は気難しそうだ。

「龍騎！大丈夫だった？こんなに血を吐いて・・・ごめんなさい私がいきなり怒ったから・・・」

村瀬が駆け寄る。龍騎は未だに血が止まらなかった。

「ごめん、栞・・・悪かった。その・・・嫉妬でもしたの？」

「まあ・・・だってあの娘をあんなに見つめてたから・・・一目惚れしちゃったのになって・・・それで不安になって・・・そしたらつい怒っちゃって」

「もう大丈夫だよ今日はごめんね」

二人とも素直に謝る。それを見ていた佐藤は――

「どうしてこんなに腹が立つの？負けたから？いやそれよりもつと別な何か・・・もしかして私・・・いや！そんな事はない！確かに格好いいけど・・・私も一緒に旅させてもらえるかな？」

そんな事を考えていた佐藤は思わず口にしていた。

「二人とも・・・ちよつといい？私も貴方達と一緒に行きたいんだけど・・・べ、別に龍騎君と一緒に居たいわけじゃないんだからね！」

この言葉が龍騎と、栞を混乱させてゆく――

## 第壱拾七話 村瀬の嫉妬（後書き）

何か最近雰囲気がどんどん変わってしまいましたね。一応、佐藤美穂は何と云うかツンデレキャラを狙ってみましたんですけど・・・語尾がほとんど同じで失敗した気がします。しかも何か修羅場みたいになっちゃったし・・・どうしよう二人旅はもうやめて三人旅にしようかな、それとも二人旅を続けようかな・・・  
相変わらず駄文ですが、よろしく願います。

最近、ツイッターで宣伝を始めました。見かけたらぜひフォローしてあげてください。

これからも応援宜しくお願いいたします。

第壱拾八話 龍騎と女の子達（前書き）

突如現れ戦った、佐藤美穂と一緒に旅をしたいと誘われる。龍騎と村瀬はどうなってしまふのだろうか――

## 第壱拾八話 龍騎と女の子達

龍騎と村瀬は驚きを隠せない。いきなりそんな事を言われるとは夢にも思っていなかった。

「だから・・・一緒に旅がしたいの！私も居たら・・・嫌だ？」

瞳を輝かせながら言われると困る。取り敢えず村瀬と相談することにした。

「栞、どうすればいいの？」

「分かんないよ・・・嫌な子ではなさそうだけど・・・」

龍騎も村瀬も返事に困っていた。そこで龍騎がある疑問を口にする。

「どうして、君は俺達と行きたいの？俺ら行き先とか無いよ？」

佐藤は顔を赤くしながら恥ずかしそうに答える。

「アタシは・・・龍騎君と一緒に・・・じゃなくて！強いアンタと居ることでアタシの方が強くなるためだもんっ！それに栞さんともお話したいし・・・」

龍騎も村瀬も困り果てていた。そして村瀬があることに気づく。そしてそれを龍騎に伝える。

「もしかして・・・あの娘は龍騎の事が好きなんじゃ？」

「本当に？まだ会ったばかりなんですけど・・・」

驚いた龍騎は、つい佐藤に聞いてしまふ。それが間違いだった。

「君って、俺のことが好きだったりする？」

「アタシは・・・全然龍騎君なんて好きじゃないもんっ！その・・・格好いいとは思っけど。とにかく！龍騎君は別に好きでも何でもないの！」

隣で村瀬が笑ってる。村瀬が龍騎に耳打ちする。

「これは、絶対好きですね。これは連れていくしか無いんじゃないですか？」

「本気で言ってるの？」

「私は何時だつて本気ですよ」

軽く溜息する龍騎だが、こうなつてはどうしようもない佐藤も連れていくことにした。

「えつと佐藤も、俺達と来ていいよ？」

一気に佐藤の顔が笑顔になる。村瀬とは違った魅力を感じる。

「アンタが呼びたいなら・・・名前でも良いけど？呼んで欲しいわけじゃ無いけどねっ！」

こういう時は名前で呼んでほしいと龍騎は理解した。

「分かったよ。行くよ美穂」

少し驚きながら嬉しそうに美穂は付いてきた。

「よろしくね美穂ちゃん」

「よろしくお願いします栞さん」

美穂が丁寧なあいさつをしていることに驚く。何故こんなに扱いが違うのか龍騎にはさっぱりわからない。栞が手をつないできた。美穂が少し哀しそうに聴く。

「もしかして二人って・・・その恋人ですか？」

「うん、そうだよ」

龍騎と栞が同時に答える。

「美穂、嫌だったら戻っていいんだぞ？」

一応龍騎が聞いてみる。しかし意味はなかった。

「だからアタシは龍騎君なんて好きじゃないもんっ！」

その後に小声で呟いてたのを龍騎は聞き取れなかった。

「何時かは・・・必ずアタシに振り向かせるもん・・・」

こうして二人旅から三人旅になった龍騎達。これから彼らはどんなつていくのだろうか！



## 第壱拾八話 龍騎と女の子達（後書き）

なんだか、どんどん変な方向に来てしまいました。自分で訳が分からなくなっております。次はちゃんと戦います。人が増えたりしません。ですがその前に番外篇を一つやりたいと思います。今回は誰の話でもなく、今後の主要人物と作者を交えての座談会のようなものをやろうと思っています。番外篇なので何時もとは全然違う雰囲気になると思うので、そっちは気楽に読んでいただければ嬉しいです。

これからも応援宜しくお願いいたします。

## 番外篇 皆で座談会（前書き）

今回は、番外編なので、なんでもあります！作者も話します！！

## 番外篇 皆で座談会

龍騎「ホントに何でもいいのか？」

作者「別になんでもどうぞ、俺に言いたいことでもいいぞ？」

八雲「久しぶりだけど一つ言わせて？出番ください・・・」

作者「久しぶりだな！八雲、もうちょい待ってくれ！」

八雲「俺、待てないよ！暇だよ！！すること無いよ！！！」

作者「お前は第三部に出てくる！！」

「「「「第三部なんてあったの？」「」「」」

作者「まだ話していない人もいつぺんに言ってきたな・・・」

村瀬「だって作者が早くハーレムの作品書きたいって・・・」

佐藤「その練習に、私を出したって聞いてるんだから！」

作者「それは言ったら駄目だよ！！美穂、ごめんその通りです・・・」

「

龍騎「言つなよ二人とも作者は技名と、名前で毎回無駄な時間使いまくりなんだから」

村瀬「やっぱり・・・私の流派だけ何故か苗字だったから・・・そうとうやる気ない・・・」

作者「それも言わないで！！けどやる気あるからね！？」

八雲「第三部って何するの？俺活躍するの？？」

作者「第三部は一对一より戦争メインかな？ちなみにこの中の誰かは絶命するから覚悟してね？」

龍騎「俺も死ぬのか？主人公だしそれは・・・」

佐藤「甘いよ龍騎君作者は始業式なのに午前4時半までAngel eats！を見たっていう酷いオタクだから・・・しかも夏休み一日でAIも全部見てラスト号泣したんだよ？だから作者は主人公を殺すことは泣ける話って勝手に信じてるからね。この作者じや失敗するのに・・・それにアタシ龍騎君とやりたい・・・って別に何も言っていないんだからっ！」

龍騎「俺達の作者ってそんなに酷いオタクだったのか！残念だ・・・」

村瀬「周りからクラス一のオタクって呼ばれてるそうです」

作者「お前ら・・・あんまり言っていると皆殺しちゃうよ？」

安西「ちなみに作者はA！のユイが好きで消えたとき泣いたらしい・・・」

作者「安西まで・・・こうなったら八雲を主人公にしてやる・・・」

八雲「来た！オタクのくせに良いところあるな！！」

龍騎「騙されるな！本当は八雲を殺そうとしてるんだぞ！この駄目作者は！」

八雲「嘘だろ？？そんな馬鹿なことが・・・」

作者「龍騎言ったら駄目・・・」

八雲「酷い作者だ・・・」

佐藤「もっと文章が上手な人に書いてもらいたかった！」

「「「「その通りだ・・・」」」」

作者「皆して酷くない？ちよつと・・・」

佐藤「アタシもいい人が書いてくれば萌えるツンデレになれた・・・いやアタシはツンデレじゃないもんっ！！」

龍騎「そういう書き方が下手なんだよ・・・」

作者「そんなこと俺が一番わかってる・・・」

村瀬「こいつ、最終的に私と龍騎でR15な話を書こうとしている噂も・・・」

八雲「オタクで変態で駄文しか書けないのか・・・」

龍騎「こんなやつに書かれるなら死んだほうがいい・・・」

作者「皆して酷いよ・・・」

村瀬「しかも受験生なのに勉強しないし・・・」

安西「高校を馬鹿にしてるからなこいつは・・・」

作者「それは一番言わないで・・・」

「「「勉強しない自分が悪い」「」「」

村瀬「そのくせ志望校が無駄に頭いいんですよ？落ちるに決まっています」

佐藤「こいつが受かったらマジメな人たち可哀相だもんね！」

龍騎「こいつの代わりに落ちる人なんて・・・屈辱だし最悪だし、オタクに未来奪われるな・・・」

作者「俺泣きそうになってきた・・・」

「「「「だつたらさつさと勉強しろよ」「」「」

龍騎「こいつが勉強しない理由はけ　お　！　！　の　沢　唯でも高校に行けるから平気って言う最低の理由らしい・・・只の駄目人間だろ？」

村瀬「そんな根拠も無いことで？」

佐藤「勉強しないの？あり得ない！！」

安西「今日は高校の見学会に行ったのに勉強してないぞ？」

八雲「可笑しいだろ・・・普通説明会行けばやる気出るだろ！？」

安西「それどころが説明会に行くのすら嫌だったらしい・・・やる気がなさすぎる・・・」

作者「言いたい放題だなお前ら・・・」

龍騎「ちよつと話し変わるがこいつは文章力無いのに、次回作候補が四つもあるらしい・・・」

村瀬「アイディアまでは、人並なのに文にすると猿以下・・・」

佐藤「自分では何故か自信あるアイディアだけど皆さんと結構かぶってるし、文章がカスだから駄目でしょうどうせアタシたちみたいに酷い作品になるに決まってるよ！」

八雲「こいつから生み出されるキャラたち・・・本当に可哀相だ」

龍騎「大体俺らのキャラの名前で精一杯なのによく作る気になるな・・・」

村瀬「しょうがないですよ糞作者ですから」

作者「お前ら酷過ぎる・・・お前たち！良く考える！！」

「」「」「何をだよ駄文男」「」「」

作者「むしろ俺じゃなければお前たちは書けなかったんだぞ？俺の文章力の低さのお陰でお前たちは活躍できるんだ！感謝しろ！！」

龍騎「お前じゃなければなあ・・・」

村瀬「もっと迫力ある戦闘シーンと素晴らしい演出に・・・」

八雲「工夫されているキャラクターの設定に・・・」

佐藤「毎回ドキドキする展開と上手な会話文に加えて・・・」

安西「人気もあつたはず・・・」

作者「えっ？つまり・・・」

「「「「お前じゃない方が面白いんだよ！！」」」」

作者「酷すぎるだろ！！」

龍騎「当然の結果だ」

村瀬「こんなに書いてあの文章力は・・・」

八雲「全く上達しない・・・」

佐藤「アタシも何時までこんなぎこちないツンデレ発言を・・・つてだからアタシはツンデレじゃないっ！龍騎君は・・・ちよつとは好きだけど・・・そういう意味じゃ無い！」



龍騎「相変わらず下手くそだな・・・」

八雲「もうツンデレは諦めるよ、少しも萌えない」

作者「ごめん・・・」

安西「自分のキャラに謝罪って・・・」

龍騎「プライドも無いのか・・・」

八雲「知ってたけど、最低だな」

作者「座談会なんてやらなきゃよかった・・・」

村瀬「しかも自分で書いてるってことは、相当自分が酷い人間ってわかってるんですね」

作者「知ってたよ、俺がかなり酷い人間だっても・・・自分のキャラに馬鹿にされるとは・・・」

「「「「これ書いてるのもダメエじゃねえか」「」「」

作者「ちよつと落ち込んでくる・・・」

龍騎「さて、こんな作者に変わってここで読者という名の神様に感謝したいと思います」

村瀬「こんな作品をいつも読んでくれてありがとうございます」

八雲「いつもアクセス数を見て驚いています」

安西「皆さんの応援のお陰で連載を続けることが出来ています」

佐藤「これからも応援してくださいって別に嬉しい訳じゃないもん  
っ！」

「「「「「相変わらず下手だな・・・」」」」」

龍騎「という訳で、これからもこの駄目作者をこれからも鍛えるの  
で・・・」

「「「「「応援お願いします!!!」」」」」

作者「僕からもお願いします!!!」

「「「「「戻ってきやがった・・・」」」」」

番外篇 皆で座談会（後書き）

滅茶苦茶でしたね・・・でもこれだけは言わせてください。これから頑張るので応援宜しくお願いします！

第壱拾九話 二人の本気（前書き）

結局、三人旅をすることになった龍騎。これから彼らに何が待ち受けているのか――

## 第拾九話 二人の本気

龍騎達三人は街を出て、道なりに歩いていった。当然龍騎と村瀬は手をつないで歩く。しかし今日は龍騎の歩調がいつもよりかなり遅い。

「内蔵・・・やられて・・・歩けないかも・・・」

「龍騎、大丈夫？けど油断するからだよ？」

「戦っている間に他のことに気を取られるだなんて・・・あり得ないは！」

二人に怒られる龍騎。正直今は誰と戦っても負ける気がする。無事に腹の調子が良くなるのを待つしか無い。だが治るのにはしばらく時間がかかりそうだ。

「栞さん、歩くときってどうして必ず手を繋ぐんですか？」

「「恋人だから」」

二人に綺麗に答えられてしまった、佐藤。しばらく佐藤の手は棍を握り続けるしか無いようだった。

「栞・・・今襲われたら頼むね・・・」

「大丈夫、たまにはゆっくり休んでね」

「アタシには任せてくれないの？」

「美穂も・・・頼むは・・・」

「アタシのためにじゃなくて、栞さんを守るためだもん！」

そんな冗談のつもりで言っていたことが、当たるとは思っていなかった。逆の道から頭に頭巾を被った男たちが歩いてくる。

「山賊・・・でしょうか？」

「アタシと栞さんなら楽勝だね！」

男たちはこちらに気づいたのか近づいてくる。かなりの人数だ。

「お前ら・・・金を寄こせ！」

「あなた方に渡すお金など御座いません、お引取りを」

「だったらその武器を置いていきな・・・」

「アンタなんかアタシの棍は絶対触らせないから！」

「ならしょうがねえ・・・その身体でも貰おうか！」

「貴方に捧げる身体など御座いません」

「面倒だな・・・お前ら！やっちなえ！！」

龍騎が黙っている間にいつの間にか戦闘になってしまった。

「龍騎は下がっててね、必ず守るから」

「行くよ！栞さん！！」

「ええそうね龍騎は・・・」

「必ず守るっ！！」

「頼んだぞ・・・」

龍騎がそういつた時には二人はそれぞれの得意な場所に移動した。

村瀬は後ろから佐藤を援護し、佐藤は棍を持ち前に出て敵の頭数を減らしていく。山賊ではまるで相手になっていない。村瀬も一発も外すこと無く正確に直撃させ、佐藤も勢い良く飛び込んで敵を吹き飛ばしていた。

「こんなものですか・・・甘いですね・・・」

「全然楽しくないよ！もつと来なよ！！」

挑発に乗ったのか、男たちが次々と飛び出してくる。しかし村瀬が増援を潰した。

「村瀬流奥義 破魔矢・・・」

天から急降下した、鉄の矢に男たちは次々とやられていく。佐藤も負けてはいなかった。

「饗饌流奥義 天穴！」

一度に何人もの男を巻き込んで吹き飛ばしていく。次は棍を自分の上で回転させた。

「饗饌流奥義 地碎衝！」

村瀬と佐藤の周りには次々と男が倒れていった。

「二人の女の子にやられるなんて、恥ずかしいですね」

「そろそろ、決めましょう！栞さん！！」

佐藤が山賊の塊に突き進んでいく。村瀬にある策が思いついた。難しいが佐藤ならやってくれるだろう

「美穂ちゃん！頼むね！」

限界まで溜められた破魔矢が飛んでいく。しかしそれは佐藤の前で落ちていった。その瞬間佐藤は何をすればいいのか直感する。

「任せてください！必ず決めます！」

佐藤が地碎衝の構えを取る。ここまでは計画通りだがここからが難しい、角度を間違えると失敗するからだ。それでも村瀬には確信があった。決めてくれると。佐藤が棍を振り下ろした。

「二重奥義！！ 破碎衝！！！」

佐藤は破魔矢で高速で落下してきた矢に、地碎衝をぶつけた。これにより矢の角度が山賊の方向へと向く。破魔矢と地碎衝が合わさった、この矢を止めれるわけがなかった。最後の山賊たちも全ての一撃で倒れた。二人の完全勝利である。

「流石美穂ちゃんね、決めてくれて有難う」

「いえいえ！ 栞さんの破魔矢が上手だからですよ！」

「二人とも・・・ありがとう・・・強かったよ・・・」

「だって、大切な龍騎のため・・・」

「こんなところで死なれても困るからね！」

「ちよつと本気を出したんだよ」

思わず顔が赤くなる。二人とも可愛くて龍騎に取っては大切な二人である。これ以上戦わないには行かない。二人のためにも負ける訳には行かない。決意と、覚悟を新たにする龍騎。しかしまだ龍騎は気づいていなかった。この地方最強の流派・・・鎖鎌くさりがまを使う流派が龍騎を狙っていたことを・・・

## 第拾九話 二人の本気（後書き）

今回は短めです。たまには村瀬にも戦わせてあげようと思って書いてみました。そろそろこの第貳部も終わると思います。この後は完結編の第参分を書いたら本編は終わると思います。

前回の番外編はどうでしたか？これを書いた日がアクセス数かなり高かったので、自虐ネタを使って良かったです。

ユニークのアクセス数がお陰さまで1300を超えました。本当に有難うございます。まだまだとは思いますがこれからも応援宜しくお願い致します。



## 第貳拾話 強すぎる流派（前書き）

三人で旅を続けている龍騎。しかしその頃彼らはある流派に狙われ始めていた。

## 第貳拾話 強すぎる流派

先の村瀬と佐藤のお陰で何とか腹の調子も回復し、無事に戦えるようになった龍騎だったが回復してからは誰とも戦わずひたすら歩くだけになってしまっていた。

「何で誰も居ないのかな」折角戦いにこんな所まで来たのに・・・」

「まあまあ、その内戦えますよ、楽に行きましょう」

龍騎と村瀬の会話を黙って聞いている佐藤。実はこの一帯には異常に強い流派がある。その事を知っていても中々話せなかった。恐らく話せば龍騎は戦いに心踊らせるだろう。だがその流派は本当に強いのである。そしてとにかく数が多い。話すか話さないか迷っていた。「美穂どうした？考え事？らしくないぞ？」

「ら、らしくないってどういう事よ！ア、アタシだって色々考えるんだから！それより、龍騎君に聞いて欲しいことがあるの！栞さんも聞いてください」

「何だよ、言ってみろ？」

「どうしたの？美穂ちゃん？」

あまり言いたくなかったが言っしかなさそうだ。佐藤は覚悟を決める。

「この辺には・・・現段階最強の噂もある・・・鎖鎌くさりがまを使う流派、かなき神風流がいるの・・・龍騎君だって聞いたことくらいあるでしょ？」

鎖鎌は、長い鎖の先端に鉄で作られた武器を取り付け、後ろから鎖を操作して扱う武器である。

「ああ・・・神風か、聞いたことはあるぞ。かなりの大規模な人数で襲うんだってな。それも強い狙いで徹底的に・・・」

「神風の名が有名になったのは少し前の大会で彼らが途中乱入して他の流派の人間全員を殺したんですね・・・頭首は残忍な性格のため、武神戦には出れない程の危険人物・・・」

二人とも顔が強張る。鎖鎌は一発当たっただけで致命傷となる。

「ここは、通らない方がいいよ？その・・・龍騎君の事が心配だから・・・」

珍しく佐藤が素直に龍騎に忠告する。龍騎が一瞬笑顔になった瞬間――その笑顔は壊された。上空から振ってきた鎖と鉄の塊に寄つて唐突に終わった。

「美穂・・・遅かったみたいだな、大丈夫必ず守るから、栞・・・頼むね」

「任せてください！必ず・・・守りますから！」

「ア、アタシも行くもん！その・・・栞さんが心配だから！」

龍騎たちを取り囲むように次々と敵が現れてくる。軽く見ただけで壹百は超えている。貳百以上いるかもしれない。その時正面から声がした。その声、その男からは今まで龍騎が体感したことのないような圧力を放っていた。

「こんにちは、武神と仲間の皆さん。私は神風流の頭首の 渡部 わたべ 卓哉 たくや と言います。残念ながら我々は公の場で武神決定戦が出来なくてですね、貴方達にはここで死んでもらいます。抵抗してもかまいませんよ？この数相手に勝てるなら・・・」

龍騎に戦慄が走る。あの男は危険だ、そう身体が告げる。立っているだけで飲み込まれそうな迫力である。それは二人も感じていたようだ。顔が怯えているように見える。

「二人とも・・・嫌なら逃げてもいい。俺は最期まで戦う」

「何言ってるんですか？死ぬなら私も一緒にです」

「少し手伝ってあげる・・・別に助きたいわけじゃないもんね！」

「そっか・・・二人とも！！生きて先に進むぞ！！」

龍騎が叫んだ瞬間三人は三角形を作りお互いの死角を消した。しかし全方位から鎖鎌が降ってくる。三人は散会し、唯一遠距離攻撃のできる村瀬は、敵の攻撃中の隙について射てるだけの弓を放って、頭数を減らす。しかしあまり減った気はしない。数が多すぎる。龍騎と佐藤は目の前に飛んでくる鎖を躲しながら敵の海に突っ込んで

いく。鎖鎌は外れると隙が大きいのでそこを付いていくしか無い。龍騎と佐藤は最前列の敵を片っ端から斬って行く。神風の人間は、接近されると距離を取りながら、鎌を投げてきて出来るだけ被害を減らす完璧とも言える戦略で三人を追い詰めていく。村瀬が隙を作ろうと矢を放つても、目の前で鎖鎌を回転させられ弾かれる。攻守一体の強力な武器である。

「取り敢えず、下っ端はその内壊滅するな・・・まあいいこっちはまだまだ人はいる。それに・・・残してあるのは全員専用の鎖鎌を持っている、熟練者だしな・・・」

余裕の表情で呟いている渡部を気にもとめず、とにかく敵を切り裂き続ける龍騎。龍騎の左手が腰の刀を探る。兄の力を借りることにした。

「兄さん・・・少し刀借りるね、神鳴二刀流・・・行くぞ!!」

佐藤も一人ひとり倒すのではなく、出来るだけまとめて数を減らししていく。それでもキリがない。三人に徐々に「諦め」の文字が浮かぶ。それでも三人とも戦うことを止めようとはしなかった。それぞれに譲れない想いがある。守りたいもの、守るべきもの、想う人のために――三人の武が覚醒を見せる。

## 第貳拾話 強すぎる流派（後書き）

第貳部はこの戦いが終わったら大体終りになると思います。この戦いでは龍騎の好敵手の彼が戻ってきます。お楽しみに。

何時も応援有難う御座います。感想など待ってますのでぜひお願いします。これからも応援宜しくお願いいたします。

## 第貳拾壹話 四天鎌の猛攻（前書き）

神風流と激戦を始めた三人、三人はこの驚異を打ち破ることが出来るのか――

## 第貳拾壹話 四天鎌の猛攻

大軍と戦闘を開始してかなりの時が経とうとしていた。三人とも疲労は溜まっているが、致命傷を受けずに何とか数を減らしていく。それでも最初の頃に比べ動きは鈍り始めていた。徐々に鎌にかする数が増えていく。疲れているのは明白であつた。後ろで渡部がほくそ笑む。

「さて・・・そろそろお前たちの出番かな？あいつらで勝つてもつまらん。専用の鎌を扱うことを認めた四人の鎌使いー四天鎌してんがまよ」  
彼の後ろで四人の男たちが立っていた。一人が告げる。

「我々は何時でも準備は万全です。全ては貴方の為にー」

彼らは、最初に襲つてきた者たちを束ねる部隊長な役割をしている。そして彼らは、自分専用の鎌を開発し、使用することを許されている神風の猛者四人。これが四天鎌である。

「皆の衆、鎌を引けっ！下がって良い！！後は四天鎌に全てを任せろ！！」

大軍は大人しく鎌を引き、後方に下がって行つた。龍騎たちには意味が分からない

「引いた・・・だと？何が起こる・・・」

「けど・・・四天・鎌って？・・・」

「分からないけど、きっと相当・・・強いと思います・・・」

奥から四人の男が出てくる。真ん中の男が言つた。

「我ら四天鎌、貴様らを全力で排除する！」

龍騎は思わず呟いた。

「三人相手に、四人の猛者かよ・・・」

「そんな事言つても・・・取り敢えず適当に別れましょう！」

「皆・・・アタシの棍で吹き飛ばす・・・」

そう言つて、二人は左右に別れていった。そして取り残された龍騎はまとめて二人の相手をしなければいけなくなつた。さすがの龍騎も辛そうだ。それは当然村瀬と佐藤も同様であつた。

村瀬の相手は、鎖の途中から五つに分かれている鎌を投げ、それぞれが互いにぶつかることで、鎌同士が不規則に揺れて落ちるといふ鎌でその姿からか「乱舞鎌」と言ふがまらんぶがまと言ふらしい。使い手の名前は将斗しょうとと名乗っていた。この鎌はかなりの曲者で、毎回違う動きをする鎌に対応するのは難しい。相手自身を狙つても、距離があるので躲される。矢を曲げて同じだつた。仮に上空に放つてもたたき落とされるだけだろう。

「さて・・・どうやって倒しましょうかね・・・」

村瀬は打開策のないまま戦いを続けていく。

佐藤も苦戦していた。こちらにも鎌が五つ付いてるがこちらは独立しておらず、固定されている。つまり通常の五倍の攻撃範囲と威力を持つていた。名はその名の通り五連鎌これんがまで使い手は、憲と言つていた・・・気がする。そんな事覚えてる余裕は、佐藤には無かつた。あんな破壊力のある鎌相手に棍を使えば、棍は一瞬で碎けるだろう。そんな事出来ない。近づこうにも、鎖が短く小回りがきき、使い手が驚異的な筋力で鎌を振り回しとても近づけそうにはない。

「これは・・・厳しい・・・勝てるかな・・・アタシに・・・」

不安を感じながらも、敵に立ち向かつていく佐藤。引く気はなかつた。

龍騎は、二人を相手にしていた。しかし一人はこちらが近づくまで何もしないので実質は一对一だつた。まだ、彼の鎌の特性は分からない。ここまで温存しているのだろうか。

「絶対何か隠してる・・・危険だな・・・」

その時、ここまで隠された敵、名は雄也の鎌が本気を見せた。途中までは変哲のない鎌だが急に蓋が開き――中から無数の小さき鎌が飛んできた。

「こんなのありかよっ!？」



龍騎も驚きを隠せない。無数に増殖した鎌が、龍騎を襲う。避けきれない状況。刀を壊されるのを覚悟したその瞬間――横からの強い力で龍騎は吹き飛ばされた。しかしこれは佐藤のものではない。別な人間に寄るもの。そして上を見ると意外な人物がそこにいた。

「久しぶりだな龍騎。こんな所で死ぬ気か？」

「久・しぶり・・・だな蒼真・・・何のようだ？」

かつて龍騎と同じ、刀で龍騎と戦った好敵手である安西やすにし 蒼真そうまが居た。昨日の敵は今日の友とは良く言ったものだ。と龍騎は内心思っていた。

「龍騎、立て。ここで負けたくはないだろう？ 奴らを・・・倒すぞ！」

「しょうが・ねえ今だけ・・・お前と一緒に・・・戦ってやらあ！」

二人は並んで刀を前に突き出した。四天鎌の二人に、そして後ろの頭首に――

「行くぞ！！必ず――倒す！！」

龍騎の心に燃える何かがあった。闘争心が湧き上がる。こいつの隣で負ける訳には行かない。それは蒼真も同じだった。互いに実力を認めた者どうしだから出来る連携が炸裂する――

## 第貳拾壹話 四天鎌の猛攻（後書き）

久々の更新です遅くなって申し訳ありません。色々大変ですが頑張  
って更新しますのでこれからもよろしく願います。

蒼真も助けに入り、盛り上がってきたーと思っっている作者です。

神風との決戦は後三話ほどで付くと思います。

何度も言っておりますが、第貳部が終われば第参部に移行予定です。

まだ殆ど何も決めていませんが・・・

これからも応援宜しくお願いいたします。

第貳拾貳話 四人の反撃（前編）（前書き）

蒼真の助太刀により、息を吹き返した龍騎。村瀬と佐藤もついに反撃に出る――

## 第貳拾貳話 四人の反撃（前編）

龍騎、村瀬、佐藤、安西はそれぞれ別れて、神風流が誇る四人の精鋭、四天鎌と戦っている。誰も倒されないが、誰も倒せない。まさに一進一退の攻防である。

村瀬は鎌どうしがぶつかり、不規則な動きを産む乱舞鎌と戦っていた。こちらにも矢を何本も放っているが当たらず、微妙な攻防が続いていた。さらに村瀬は四天鎌の前の雑兵から戦っており、明らかに疲れていた。村瀬の顔色は良くない。

「このままじゃ・・・負ける。どうすれば・・・」

降り注ぐ鎌を見ながら考える。矢に今までより大きな力を与える必要がある。その方法を考える。そして、唯一の打開策が頭に浮かぶ。村瀬流の大技。今まで成功したことは無い。それでも決めなければならぬ。出来なければ死ぬ。あの人と二度と話せなくなる。それだけは嫌だ。村瀬は決めに行く。

「昔、ある人は言った。一本の矢は脆くても三本にすれば折れないと。それを再現したあの奥義を必ず決めてみせる・・・」

独語した村瀬は破魔矢に使う先端が鉄でできている矢を、三本取り出した。それを同時に弓に構える。幅も狭く弓が重さに耐えきれず悲鳴を上げる。それでも村瀬は構わなかった。村瀬流の頭首に伝わる一子相伝の技を、ついに見せる。

「村瀬流・・・秘奥義・・・昇竜流星群しやうりゅうせいしゅうぐん！！」

三本の矢が天空へ羽撃く。空に舞った矢は、地上を向き流星群のように降り注ぐ。それを落ちてくる前にたたき落とそうとして、乱舞鎌を投げつける。しかし三本の矢が密着して力が合わさった矢を簡単に弾くことは出来ない、その隙に――敵の将斗の腹に何かが突き刺さっている。それは当然村瀬の放った矢である。昇竜流星群に気を取られて、村瀬を見るのを忘れていた。その間に村瀬は落ち着い

て矢を取り出し彼に向かって矢を放っていた。彼の腹から血が飛び出してくる。その場に崩れ落ちた。村瀬が掴みとった薄氷の勝利である。

「龍騎・・・私勝ったよ・・・」

笑顔で満足気に言う村瀬は力なく地面に倒れた。

その頃佐藤は五連鎌に潰されないように神経を研ぎ澄まして動きを見切っていた。しかし近づくことは出来ない。あの鎌は他のものより鎖が短く、隙が小さい。それにより中々佐藤は飛び込んでいけない。

「何なのよ、あの鎌・・・すぐに倒してやるんだから・・・」

心のなかでは強気だが、中々そうは行かない。あの鎌を躲して一気に間を詰めなければいけない。難しい問題である。横に躲すより・・・上に逃げることを思いつく。しかしそれは相手の動きをしっかりと読まなければ失敗してしまう。しかし村瀬同様負ける訳にはいかない。本当は好きな人とまた笑い合うためにも、引くわけには行かない。

「り、龍騎君のためにちよつと全開で行く・・・」

憲を見定め真正面から走っていく。そして鎌が佐藤に当たる直前、佐藤は棍を地面に挿して一気に上空に舞い上がる。その高さは五連鎌の攻撃範囲より僅かに上である。つまりこの間は確実に佐藤有利である。しかしそんなの一瞬で終わる。決めれるのは一回だけである。

「とつておき・・・見せてあげるんだから・・・」

憲の真上まで行くと、天穴の様に、棍を螺旋状に回転させる、しかしこの技は最後に、右手の手首を棍と同じ方向に回すことで、更に回転を増す。そして超回転を掛けた棍が佐藤の手から離れる瞬間佐藤は吠えた。饗饌流の奥義の名を。

「饗饌流・・・秘奥義！　おつかせんげき桜花螺旋撃！！」

放たれた棍は、敵の頭蓋骨に直撃し、勢いと、回転で頭蓋骨を破壊していく。そこに佐藤が地面に降りる前に棍を更に押し込む。

「これでえ．．．決まりだあつっ！」

彼の頭蓋骨が砕けた音がした。そして最後に吹き飛ばした後、もう憲は立つことはなかった。

「倒せたんだから．．．負けたら許さないんだからね．．．」

村瀬と同じように力尽きて地面に倒れた。

龍騎と、安西は敵の途中で鎌の中から無数の小さな鎌の出る増殖鎌に手を焼いていた。

「二人は無事に勝ったみたいだな．．．」

安西が告げる。龍騎はむ胸をなで下ろした。

「二人とも．．．勝ってくれて良かった．．．」

こうなると二人も負けてはいられない。闘志を燃やす二人。

「あの二人は死にましたか．．．まあ四天鎌の雑魚ですからね、彼等は．．．」

二人を苦戦させている増殖鎌の使い手が余裕の表情で喋る。もう一人は動く気配がない。二人が言う。

「「お前等は．．．俺らが必ず倒す！」」

二人の反撃が始まる――

## 第貳拾貳話 四人の反撃（前編）（後書き）

結局、二つに分けることにしました。まず二人の反撃です。次回は安西の新技も見せれると思います。

更新遅れてすいません。次回からはもう少し早く書けるように頑張ります。

これからも頑張って書いていくので応援宜しくお願い致します。

## 第貳拾參話 四人の反撃（後編）（前書き）

四天鎌の猛攻から、反撃に出た村瀬と佐藤。龍騎と安西も四天鎌を打ち倒すことが出来るのか――



## 第貳拾參話 四人の反撃（後編）

龍騎と安西は四天鎌の一人、雄也の操る増殖鎌と戦っていた。鎌の中から別な鎌が一斉に放出されるこの鎌相手では流石の二人も手を焼いていた。

「蒼真……こいつは厳しいな……」

龍騎が辛そうに話す。彼は四天鎌と戦う前から戦っており疲れが溜まっているのだろう。

「龍騎、なら下がってるあいつは俺が斬る」

そう言々と安西は雄也の前で一呼吸置いたあと、雄也に向かって飛び込んでいった。

「死ぬなよ……蒼真……」

龍騎がそつと呟く。この声は蒼真に聴こえることは無かった。

安西は雄也の近くまで走って行くと雄也は増殖鎌を放ってきた。

「この鎌がある限り……俺は負けませんよ」

安西の目の前に無数に襲ってくる鎌が見える。しかし彼は動揺を見せることなく回避した。

「俺の本気を見せる……蘇澳流奥義 水面<sup>みなも</sup>」

彼は一瞬立ち止まったあと、静かに鎌の真横にまで移動した。

「疾い！全身の力を一瞬全て抜いた後に膝の力を一気に使って急速に躲した……」

離れてみていた龍騎が驚愕する。やはり彼は並外れた強さだった。

そのまま一気に間合いを詰める安西はとうとう刀の間合いにまで入っていた。

「さて、これで終りにする……」

安西が間合いを詰めると雄也は慌てた様子で後ろに飛ぶ。どうやら次の鎌を投げる準備をしている様子だった。しかし安西にはそんなのを待つ義理はない。勢い良く刀を抜刀し、そのまま雄也の足元を狙った。しかしその初段は完全なる罠であった。

「蘇澳流奥義 燕（しやう）」

足首辺りまで行った刀が、彼の手首のちょっとした動きで一気に首筋まで飛んでゆく。まさにその動きは空を自在に飛ぶ燕の様であった。この技を避けれるほど雄也は強くない。燕を受けてそのまま命を落としていった。そして最後の四天鎌がついに動いた。

「他の四天鎌を全て倒したか・・・だが俺はこいつらと違って弱くない」

「絶対、ぶっ倒してやるよ！」

龍騎が吠える。彼の体力は充電された。

「行くぞ蒼真あいつを潰す」

二人は彼に飛び出した。彼は鎌で攻めることは無い。相手が近くに来たときに両手の鎌を回転させるだけである。たったこれだけなのに他のどの四天鎌よりも強い。何故なら守りが堅く崩せない。無理に行っても刀を壊すだけである。だから二人とも攻めあぐねている。彼、涼平の双竜鎌である。前後左右上空も抜かりなく防御できるその防御性能の高さと、的確に鎌を動かす彼の力は流石は四天鎌最強の男と言ったところであつた。二人とも攻撃できずに近づいては引くことを繰り返すしかない。

「神鳴の・・・秘技なら、敵の隙を生むあれだったら・・・」

龍騎は、彼を倒す方法を考えていた。そして一つ試してみたい方法が浮かんだ。

「蒼真、少し下がっててくれ、後は俺に任せろ」

今度は龍騎が突っ込んでいく。当然涼平の双竜鎌は回転したままである。

「まずはあの鎌の片方を崩す、その後は相手次第だ・・・」

涼平の前で抜刀させた龍騎がついに動く。刀を握っていない手で刀を持っている手を弾いた。

「まず一発目だ！神鳴流奥義 朱雀！」

剣速が加速された刀は鎌に向かっていく。更に龍騎は空いている手で刀を螺旋状に回転させた。

「朱雀だけでは終わらない！喰らえ神鳴流奥義 八咫鏡！」

回転も追加された刀は鎌に触れたその瞬間――

「鎌が刀の回転に巻き込まれたっ!？」

涼平に動揺の色が見える。円を描いていた鎌は龍騎の刀が当たった瞬間彼の螺旋状に回転する刀の動きに飲み込まれるように絡まっていった。これで双竜鎌の一つは使えない。一気に詰め寄る龍騎。それでも涼平には未だ一つの鎌が残されている。ここで油断してはこちらが死ぬかもしれない。龍騎に教えられた神鳴の新たな奥義を使う。

「神鳴流秘技 雲霞くもがすみ!!これで最後だ！」

二本目の刀を抜き、上段から振り下ろそうとした刀は突如涼平の視界から消えた。腕は振られてるのに。明らかに動揺していた涼平。そして振り下ろした勢いで地面まで沈み込んだ龍騎の手には――消えたはずの刀があった。龍騎は右手で、涼平の身体に、刀を挿し込み、両手で刀を首元まで上げて彼の命を断ち切った。倒れた涼平の後ろに立っていた、渡部には両手で刀を握り、鬼の様な気迫を吐き出している龍騎が見えた。

「龍騎・・・あれはいつたいうやっただ？」

今度は後ろに下がっていた安西が聞く。龍騎は素っ気無く答えた。

「雲霞か？あれは上段斬りの途中で刀を握っている手を離すんだ。

そしたら刀は勢い良く地面にまで落ちるだろ？そして刀と一緒に自分も身体を一気に沈めて落とした刀を取る。そしてそのまま相手を斬るんだ、まあ神鳴の奥の手だ。だからこの技は奥義じゃなくて秘技って呼ばれる」

言い終わった龍騎は、斬り倒した涼平の後ろにいる男に目を向ける。

「さて・・・決着をつけるぞ！」

「ええ・・・どちらが武神に相応しいか、最後の殺し合いです」

龍騎達四人と神風流との決着の時は近い――

### 第貳拾參話 四人の反撃（後編）（後書き）

これで四人全員反撃しましたね。何とか四人とも新技を出せて良かったです。そろそろ人物紹介も更新するのでそちらも見てみてください。

今回の龍騎の技はちょっと無茶があったかもしれませんが、分かりづらいところなどがあつたらメッセージを送ってくれば出来るだけ解説したいと思いますのでぜひお願いします。  
これからも応援宜しくお願い致します。

## 第貳拾四話 一騎討（前書き）

四天鎌全員を倒した龍騎達。ついに渡部との一騎討が始まる――

## 第貳拾四話 一騎討

四人それぞれが一人ずつ四天鎌を打ち破った龍騎達、残すはあと一人頭首の渡部卓哉だけである。

「蒼真、お前は下がってろあいつは俺が倒す」

龍騎がそう言うのと安西は大人しく後ろに下がった。これで一騎討の準備は整った。ここまで闘い抜いた皆の思いを無駄には出来ない。どんなに強くても必ず勝とう、と決意を固めた龍騎。

「まさか、全員倒されるとはな・・・予想外だよ・・・」

そう呟きながら鎌を構える渡部。見たところ彼の鎌に特徴はなく自分の鎌に対する自信が見える。

「俺達を狙ったこと・・・心底後悔させてやる、あの世でなっ！」  
最早龍騎に遠慮は無い。渡部目がけて一気に走って行く。

「さて・・・武神君は自分の手で殺さないかね・・・」

だるそうに鎌を回しながら渡部は呟く。龍騎とは正反対である。龍騎の場合感情を前面に押し出して戦うが渡部は心境を相手に見せることはなく淡々と鎌を操って龍騎の攻撃をしのいでみせた。

「やっぱ刀で突進は難しいな・・・さっきのように雲霞はもう使えないだろうし・・・」

心のなかで独語する龍騎。その時攻めを見せなかった渡部が攻めを見せた。右手のみで鎌を操り上空から降らす。その鎌だけに意識を向けすぎたのが仇となった。渡部の左手から別な鎌が飛び出してくるのが見えた。鎌の二段攻撃だった事に龍騎は気づくのが遅れた。間一髪でかわしたはいいものの龍騎は渡部の力を見くびっていた。地面に触れる少し前に鎌が開き無数の小さな鎖が龍騎を襲った。

「嘘だろ！？分裂鎌だと・・・間に合わない！」

無数に分裂したうちの幾つかが龍騎の身体に直撃した。肺から空気を吐き出す。

「どうだい？俺の開発した元祖分裂鎌の威力は？もともとあの四つの鎌は全て俺が設計したものだ・・・あいつらは俺の作ったものを貸してもらっているだけ。あの四つをもっとも上手く使いこなせるのは・・・俺だ」

吹き飛ばされた龍騎に休む暇はなかった。もう一度右手を高く上げ鎌が振ってきた。慌てて起き上がり鎌の直撃は防いだもののそもそも分裂鎌での痛みが激しかった。

「骨何本かは折れたな・・・この調子だと負けるか・・・」  
龍騎は若干ふらついた足で渡部に向う。

「誰が・・・お前なんかに負けるかよ・・・」

「そんな弱々しい声で言われても困るな」楽にしてやるよ」

また上空から鎌が降ってくる。しかし龍騎はそれを待っていた。疲れている足に力を込め一気に加速する。当然体中が痛いさっきのは油断させるための演技だ。

「もう動けないなんて・・・誰が言ったんだよ！」

今の渡部は右手は鎌を投げていて使えない。だからそのまま右手に向かつて突っ込んだ、そこで加速を加え背後まで回る。骨が軋むがそんなこと気にしている場合ではない。

「後ろに回って・・・勝ったと思うなっ！」

左手の鎌が龍騎に向かって飛んでくる。後ろに目があるかのように正確に飛んだ鎌は龍騎の左肩に直撃し肩が砕ける。もう左手は使えない、しかしそれも関係ない。

「喰らえ！これが俺の！兄さんの！神鳴の力！神鳴流奥・・・」

体の動きが止まる。これまでの戦いの蓄積と今回の疲労、そして分裂鎌の直撃に左肩も壊された。満身創痍の龍騎に動く気力は無い。その時煌輝の声が脳裏によぎった。

「神鳴の子なら・・・最・・・後ま・・・で負ける・・・な」

消え行く命で最期に言った言葉。まだ龍騎は勝っていない。どうせ死ぬならあいつも道連れだ。力を振り絞る龍騎。鎌を一周させ再び龍騎のもとに放つ渡部。二人の咆哮がこだまする。

「神鳴流奥義 極の型 虚陽！」 「こんな餓鬼ごときに！」

龍騎の刀は渡部の背中に、渡部の鎌は龍騎の腹に、それぞれ直撃した。その時目を覚ました村瀬が驚愕する。龍騎が――吹き飛ばされていた。

「嘘だ・・・龍騎？ そんなことって・・・龍騎！」

悲痛な村瀬の叫びと共に龍騎達と神風流との戦いは幕を閉じた。



## 第貳拾四話 一騎討（後書き）

何か・・・すいません。待たせたのにあっという間に渡部の出番が終わってしまいました。鎌の武器の特性上技って考えにくいんです。だから鎌の種類でその穴を埋めようとしたんですが四天鎌のアイデアで精一杯でした。すみませんいいわけです。頑張ります、次回で「龍騎神話編」も終わりです。多分第参部もやると思います、多分・・・

新作予定の「流れ星にハーレムの祈りを」（仮）ですが大体は出来てます。本当です。もう少しで完成します。どんなに遅くても来月の初めにはお見せしたいと思います。

長くなりました、申し訳御座いません。これから応援宜しくお願いします！

## 第貳拾五話 終わりと始まり（前書き）

一騎討の末相打ちに終わった龍騎と渡部。龍騎が倒れたことは旅の終わりを意味する。彼らはこの先どうなるのか！

## 第貳拾五話 終わりと始まり

「ねえ龍騎、目を覚ましてよ・・・起きてよ・・・」

村瀬の悲痛な声が木霊する。龍騎は目を覚まさない。心臓が動きを止めているわけではないが出血が激しく、不安定な状態だった・

「立ちなさいよ・・・まだ言いたいこといっぱいあるんだからっ！

」

佐藤も声を上げる。二人とも傷ついた体で精一杯龍騎を介抱した。

「まだ、お前との決着は付いてないだろうが・・・」

安西が呟く。彼も龍騎を心配していた。そしてそのとき龍騎は不思議な空間にいた。

「ここは・・・どこだ？一面が白い・・・ここが黄泉の国なのか・・・」

彼は周り全てが白い空間にいた。何も無い白い空間に。自分以外の人や建物は無く只一人でそこにいた。彼は自分が死んだと直感した。「俺の人生も・・・呆気なかったな・・・」

彼は前に進んでいった。それでも誰もいないし何も無い。どこまでも続くかのような白い世界。だが世界の先、果てに見知った人間がいた。

「龍騎・・・来たのか・・・」

「兄さん・・・なの？」

そこにいたのはかつて自らが倒した兄、煌輝の姿があった。

「俺は俺だ・・・誰かに負けたのか？」

「相打ち・・・かな？死んだかはわからないけどここにいるんだから死んだんだと思う。」

兄は小さく溜息を付いた。

「お前はまだ死んでない。だから戻れみんなのいる世界に」

「何言ってるのさ！？もう戻れないんだよ？」

龍騎の現世で使っていた体など何処にも見当たらない。それどころかさっきまでいた世界自体何処にあるのかわからない。戻れるはずが無かった。

「現世はこの世界の下、つまり裏側にある」

「・・・裏側？」

「ああそうだお前の足元に現世はある。」

龍騎にはさっぱり意味がわからない。

「どうしてそんなことがわかるの？」

「龍騎よく聞け、世界はすべて表裏一体だ。生と死、出会いと別れ、始まりと終わり、これは剣術にも当てはまる。攻めと守りのようにな」

「つまり・・・ここは死んだ世界だからその裏には現世があるの？」

「正確にはここにも生はある。ここでは精神が生き続ける。肉体は果てても精神がな、この世界の裏にあるのは肉体と、色の付いた世界だけだ」

「だったら今まで俺が斬って来た人間や、ほかの死んだ人たちは何故ここにいないの？」

「現世で満足して精神が要らなくなった人間は昇華される。だから昇華したんだよ満足した精神とともにな」

「兄さんは・・・満足できなかったの？」

「お前に、伝えることがあったんだ、それだけが心残りだったそれを今から伝える」

「それって・・・なに？」

「神鳴流 秘奥義 神鳴 最終奥義だ」

「それが心残り・・・」

「いまからすべてを教える・・・これが俺の全てだ・・・」

「そう、それが神鳴、極めの技だ」

完成した奥義に驚く龍騎がそこにいた。

「凄い・・・凄すぎる・・・」

「さて、そろそろ俺は行くかな・・・」

「兄さん待つて！もつと話していたい！昇華したら会えなくなるんでしょ！？」

「そうだ、だけどそれでいいだろ？ひとつの終わりは新しい始まりを告げる。そうは思わないか？」

振り返って歩いていく兄に手を伸ばす届きそうで届かない距離に兄はいた。

「じゃあな・・・現世で満足したら帰って来い・・・」

手を伸ばした先に一瞬笑顔で振り返ったその直後――

「兄さん・・・さようなら・・・」

砂のように静かに兄は消えていった。昇華された。この世から精神を解き放って。

「俺も・・・戻るよ・・・戻るべき世界に・・・」

龍騎は足元を見て地面に飛び込んでいった。亡骸に精神が入り込む。復活した。

「ただいま・・・戻ったよ」

「龍騎！！！！」 「遅いのよ！馬鹿！！」 「心配掛けやがって・・・」

起きると三人の顔には安堵の表情が浮かぶ。

「悪かったって、もう大丈夫だ」

「兄さん・・・俺こっちで戦い続けて・・・昇華するよ、だから待つてて・・・」

龍騎は心の中で独語した後立ち上がった。

「さて、強いやつに会いに行くぞ！！」

「「「行きたくない！！！！」」」

若き武神は今日も戦い続ける。死ぬまで、満足した生を送れるまで

## 第貳拾五話 終わりと始まり（後書き）

色々申し訳ありません！！

まずは更新が遅れてすみません！！なかなか書く時間が見つけれなくて・・・本当にすみません！

次に超展開になってしまつてごめんなさい！！書いてて滅茶苦茶だとは思いましたが書ききつてしまいました・・・ごめんなさい・・・第参部ですが・・・一応やります。舞台は・・・二年後ぐらいがベースです。

ぐだぐだになつてきましたが、これからも応援ぜひお願いします！

第貳拾六話 次なる闘いへ（前書き）

限界を超えて勝ち抜いた龍騎。龍騎、朧、美穂の三人は一度自分の故郷に戻ることにした。

## 第貳拾六話 次なる闘いへ

「戻ってきたな・・・大神家に」

一人呟く龍騎。今彼は一人で歩いている。栞と美穂の二人はすでに自分の故郷へ戻っていった。栞は最初に会った城に戻り、美穂は親のいる村に戻っていった。龍騎も久しぶりに親や門下生のいる故郷に戻ってきた。

「誰だ、その餓鬼。師匠の住むこの大神家にー」

門の前に仁王立ちする見張りの男に呼ばれる龍騎。どうやら龍騎の顔は忘れてしまったようだ。

「忘れましたか？お久しぶりです。俺、龍騎ですよ？」

「りゅ・・・龍騎さんっ！戻ってきたんですか！お久しぶりです！」思わず安堵の溜息を付く。懐かしいところは居心地がよかった。

「お前ら！龍騎さんが帰ったぞ！！出迎えやがれ！！」

男が叫ぶと門下生の皆が走って二列に並び道を作り、声をそろえて

――

「・・・お帰りなさい！龍騎さん！！」

「ただいま、皆久しぶりです。門下生が増えましたね・・・」

「流石！全員覚えてるんですか？」

「旅に出る前の門下生は覚えてるよ、壱貳四人いましたね？」

神鳴流は門下生をとても大事にすることで有名だ。門下生は大神家に泊まり毎日皆で飯を食べる。

「その通りです。今は参貳五人まで増えましたかね」

「それは凄いい・・・父上と母上と叔父上は？」

さつきから三人の姿は見えない。普段ならいるはずだが。

「あの方たちなら今は席を外しております。もうそろそろで帰ってくると思いますが・・・」

「そっか、ところで皆ちゃんと強くなっただよね？」



笑顔で門下生達に聞いてみる。

「「もちろんですっ！」」

「そっか・・・じゃあ木刀で勝負しよう。一太刀でも入れたら俺の刀をやるよ」

この一声に皆はやる気満々だ。落ちてた木刀を拾い上げ、全員と戦うことにした。

「さあて・・・皆、束になってかかってきな！」

「さて・・・もう終わりかな？」

「強すぎですよ・・・流石ですね・・・」

結果は龍騎の圧勝だった。全員打ち負かされてしまった。

「皆、前より強くなりましたね」

そんな事を喋っている内に玄関に見知った人影が見えた。

「父上・・・母上・・・叔父上！」

「久しぶりだな龍騎、お疲れだったな」

短い旅を終えた龍騎に、さらなる飛躍が訪れる――

## 第貳拾六話 次なる闘いへ（後書き）

更新遅くなつてすいません、そのくせ短文ですみません。

ここからは後2、3話かけて第参部までの繋ぎを書きます。

もう一方の勢いで書いてしまった作品と平行して書きますので更新は遅くなるだろうと思いますが最悪一週間に一話のペースで書きたいと思いますので応援お願いします！

## 第貳拾七話 村瀬の帰郷（前書き）

龍騎同様家に戻った村瀬。さらなる高みへ修行を開始する――

## 第貳拾七話 村瀬の帰郷

「お帰り栞、旅はどうだった？」

「辛かったけど楽しかったです、ちゃんと強くなりましたよ？」

村瀬家のある城へと帰郷した栞。久しぶりながら簡単な挨拶を交わす。

「それで何で戻ってきた？」

「龍騎の旅が一段落して彼は強さを求めるため故郷に戻りました。それで私もー」

村瀬はもつと強くなりたかった。龍騎が背中を預けられるほどに。

「分かった・・・だが俺から教えられるのは後ひとつだけだ」

「一つ・・・ですか？」

「そうだ、秘奥義を使えるようになった栞には村瀬流最終奥義以外に教えることはない。」

村瀬最終奥義。古来から泣く子も黙るといわれた技だがこの技は何より使い手を選ぶ。よってこの技を継承できたのは歴代の頭首の中でも数少ない。

「この技を覚えたときーお前は大切な人の矢になれるはずだ」

「分かりました、必ず極めて見せますー」

村瀬が最終奥義の修行に取り掛かっている頃龍騎はー

「流石父上・・・でも！」

父との仕合をしていた。誘ったのは龍騎本人。今まで勝てなかったが全てを試すつもりで挑んだ。

「神鳴流奥義 虚蝉！」

龍騎が勝負に出る。相手の背後に回り込みそこから跳躍して空中に飛んだあと、そのまま斬り付ける大技にして得意技。

「俺がお前に負けるとでも？」

しかし龍騎の技は全て見破られてしまい・・・

「甘いんだよ！」

首に刀を突きつけられて敗北した。

「少しは強くなったか・・・お前にはまだ教えてない奥義がたくさんある。だからまだ強くなる。」

「本当か！？だったら今すぐにでも教えてくれ！早く！」

龍騎は誰よりも強くなりたかった。暇な時間など少しも無い。

「分かったよ、じゃあ行くぞ！」

強くなるまでの道はまだまだ限りなく遠い――

第貳拾七話 村瀬の帰郷（後書き）

遅くなつてすみません！遅れました！  
展開が滅茶苦茶です！反省してます！

最近この小説の書き方忘れました！誰か教えてください！  
そんなわけでこれから応援よろしくお願いします！

## 第二回 皆で座談会（大反省会）（前書き）

そのまんまです！去年やった企画ですが、覚えている人はいるでしょうか！？いる方は大感謝、いないかたはそちらも合わせてみてくださいね（宣伝です）

## 第二回 皆で座談会（大反省会）

龍騎 「まずは皆さん・・・本当にすいませんでした!!」

栞 「うちのカス作者が皆様に御迷惑をお掛けしました・・・」

作者 「本当にすいませんでした!!!」

龍騎 「まずはこうなった経緯を語れカス」

作者 「いままで話を書いていたPCが去年ご臨終しましてね、私は父に修理を依頼しました。しかし・・・受験生にPCいらんからWWと一蹴され更新できませんでした」

栞 「何故10月まで放置したんです？4月の時点でPC復帰してましたよね？」

作者 「それは、難しい質問だね」

龍騎 「ネタなかったただけだろカス野郎」

作者 「ホント・・・すいません・・・」

美穂 「それで!?!?ようやく私の出番かしら?変態作者!」

作者 「お前は・・・下手ツンデレ棍娘!」

美穂 「私が、下手なのは誰のせいかしら?」



作者 「本当すいませんでした」

龍騎 「ちなみに何で復帰しようと思ったんだよカス」

作者 「それはね・・・こないだアクセス解析したら今月も80アクセス超えててね・・・まだ見てくださる方がいるんだと思うと・・・自然と書く手が動いたんだ・・・」

美穂 「カッコイイこと言ってるようで全く言っていないわよね？」

栞 「うん、全く言っていないよ？」

龍騎 「だいたいその方たちだって何か他のと間違っただけだし、ちゃったんだろ？だれがこんな更新放棄した駄文小説読むんだよ」

作者 「俺もそう思うんだけどね・・・でも嬉しかったんだよ・・・」

「

栞 「ちなみに何で座談会からスタートなんです？」

蒼馬 「それは、こいつキャラ名も技名も全部忘れたからだよ」

龍騎 「他には当時これを更新したときは本編差し置いてしばらく話別アクセス1位だったからだよ？」

作者 「全くもってその通りです」

美穂 「相変わらずこいつ最低ね・・・」

栞 「で？これからどうするんです？続き的にはいきなり私メイ

ンの話ですよ？」

作者 「そうだね、次は栞でその次美穂やったら新章突入だね！」

龍騎 「それまで10年かかるな」

美穂 「違うわよ、20年はかかるは」

作者 「そんなにかからないもん！」

栞 「じゃあ、脳内で考えてたのを文に起こしたら案の定酷い出来のもう一つの話は？」

作者 「何とか成るんじゃないかな？」

龍騎 「なるわけねえよ、カス」

作者 「取り敢えず頑張っていきたいと思いますので応援よろしくお願いします！皆様の応援が全てです！！」

龍騎 「子のダメ作者は応援がなきゃ生きて行けないんで取り敢えずお世辞でもいいんで応援してやってください、お願いします！」

栞 「私と龍騎の恋物語はこれからだ！」

美穂 「栞さん・・・そんな事言っと一生更新されませんよ・・・」

## 第二回 皆で座談会（大反省会）（後書き）

久しぶりに書きました。口調が変わってる気がします。全話読みなおしてきます。けど読みなおすのって恥ずかしいんですね、勢いだけで書いてますから。読み直すと恥ずかしくて死にたくなります。でも今回は頑張ってみせるよ！応援よろしくお願いします！！

第貳拾八話 強さを求めて（龍騎編）（前書き）

あけましておめでとう御座います・・・前の更新から気づいたら年  
明けてました・・・今回は本編です・・・今まで何書いてたか忘れ  
ましたけど・・・

第貳拾八話 強さを求めて（龍騎編）

龍騎は本家に戻ってから一日も休む事なく父と剣を合わせていた。

答えは当然強くなるため。

何でと言われれば脳裏には大切な人、村瀬 栞の顔が浮かぶ。

彼女を危険な目に合わせてしまった後悔が龍騎を過酷な修行に向かわせている。

今は父と刀を打ち合っている。

「くそ・・・何で一本も取れないんだよ！」

「そんな雑な動きで・・・勝てると思うか！」

龍騎が踏み込んだ刹那、父の返し技を喰らい刀を弾かれ決着はついた。

「闇雲に勝負を決めに行くからだ、もっと落ち着いて相手を見ろ」

「そんな事言っただって・・・父さんどうやって動いてるかよく分からないし・・・」

「まあそんな事言ってるようじゃまだまだ俺は負けないな！」

悔しいがその通りだったからそっぽ向いて座る。このままじゃ絶対に栞を守れない。

「ところでお前・・・女でも出来たのか？」

「っ・・・！いきなり何言うんだよ！！」

「いやー最近やたら熱心だなとは思ってたが図星かー今まで見たこと無い顔してるぞ？」

自分でも俺に顔が熱いのは分かった。恥ずかしくて口には出さないが。

「まあ少しはまともになってるからその内一本ぐらいは取れるようになるんじゃないのか？に何時かかは知らないけどな！」

「じゃあ兄さんから教わったアレで行く・・・」

「お前・・・アイツと話したのか？」

「ちょっと色々あつてね、構えてよ」

相手に使うのはこれが初めてだった。でも龍騎には決めれる確信があった。龍騎の体は相手を切ることに全神経を傾けていく。そしてそれに応えるように父が動いた。

「何で来るかは分かんが・・・見極めてやる。来い」

「行くよ・・・神鳴流 秘奥義・・・神鳴」

刀は弾き飛ばされた。龍騎のではない。

「お前――それ教わってたのか？」

「うん、託されたんだ。。心残りだって」

「だが、ソレは同じ相手に二度利かないぞ？次は神鳴に頼らず俺を倒せ」

「言われなくても、倒してみせるさ」

（神鳴は確かに強い・・・でも利くのは最初の一撃だけ・・・二回目からは避けられる）

「神鳴に頼らない力をつけなきゃ・・・栞は守れない・・・」

道場を出て空を見て誓う。大切な人を守る力をつけると――

第貳拾八話 強さを求めて（龍騎編）（後書き）

何か久々に書いたら変な感じがします。と言うか前と書き方ぜんぜん違う気がします。大丈夫ですかね？ただでさえ酷いのこれ以上ひどくなったらと思うと・・・

頑張ります、次は村瀬編です。書いてみせる・・・



第貳拾九話 強さを求めて（村瀬編）（前書き）

・ 3ヶ月ぶりの更新なのに皆さん見ていただいて有難うございます・  
・ これからも是非よろしくお願いします・・

## 第貳拾九話 強さを求めて（村瀬編）

龍騎が父と修業に励んでいたのと同時に村瀬もまた父の元で自分の弓術に磨きをかけていた。

「父上？私たちの流派って技少くないですか？双極矢と破魔矢それに昇竜流星群しかないじゃないですか」

「まあ弓術はそんなに作れなかったんじゃないか？先代達も・・・曲がる双極矢を考えただけでも大したものだと思うぞ？」

「それはそうですけど・・・龍騎は沢山あるのに私たちは戦術の引き出しが少ないと思いませんか？」

村瀬がむくれ気味に言う。確かに神鳴流は村瀬が見たもので8つ程あった。もしかしたら未だ有るかもしれない。

それに比べて自分の村瀬流は3つしか無いとなれば少しは不満もあるだろう。

「いいか？元々弓と刀では戦いたい相手が違うんだ。剣術は一体多数もあるが基本は一对一で戦えるような技が多い。居合なんて敵に囲まれた中で使ったって勝つのは難しいだろ？勿論龍騎君の様な強者であれば覆すことも出来るが基本は難しい。だけどな？弓はそんな武器を差し置いて遙か遠くに飛ぶ。だから弓は前を行く者の後ろから彼等の戦いに祈りを込めて敵を削るように撃てばいい。」

村瀬の父は栞に諭すように言い続けた。

「それは分かってますけど・・・この間は一騎打ちしたんですよ？弓は私一人ですから父上の言うように削るのは難しいのです・・・それに削る前に龍騎君と美穂ちゃんが薙ぎ倒しちゃうし・・・」

中々栞が納得してくれないのでしようが無く父は口を開けた。

「まああるにはあるんだぞ？未だお前に教えてない技は」

「本当ですか父上！？今すぐ教えてください、お願いしますっ！」

村瀬は目を輝かせずぐにお辞儀しながら言った。

「けどな？残りはお前の使っている弓より大きく思い強弓を使う必要があるんだ、こういう事は言いたくないが女のお前には難しいだろ・・・」

父の忠告を聞いた後村瀬は迷わず言い放った。

「構いません！それで強くなれるのなら・・・どの道筋力が必要だと思ってましたから。お願いします。皆を護る力を私に習わせてください・・・」

「そんなに龍騎君が好きか！なら教えてあげないと駄目か？」

「な・・・別に龍騎とは言っていないじゃないですか！」

笑う父に頬を染める娘。村瀬もまた守る為の力を求めて厳しい修行に挑む――

第貳拾九話 強さを求めて（村瀬編）（後書き）

これ書くために前に書いたのを読み直したんですけど、村瀬の秘奥義 昇竜流星群って撃つたのいいけど結局止めさせたのは普通の矢だったんですね。無駄に大技なんで気を取られた隙に普通の矢を放つ・・・確かに勝てばいいんでしょうけど小説でこの終わりは・・・あれですよ。

二人ともお父さんの名前無いですけど許してやってください。  
次回は美穂編です！お楽しみに？

第参拾話 強さを求めて（美穂編）（前書き）

気づいたら30回もやってるんですね、これ。ちょっとびっくりです。このぐらいのペースで最初から書いたら50は越えますよね・  
・ 本当に大した進みもしない話を待たせてしまって申し訳なく思います・・・

第参拾話 強さを求めて（美穂編）

龍騎、栞が実家に戻り修行を積んでいた頃美穂は一人山道を歩いていた。

「師匠・・・何処に居るんですか？アタシを拾ってくれた恩人・・・」

「

元々美穂の家は武術をやっていたわけではなく彼女が小さい頃師匠と慕う男に拾われ棍術を教わり今に至る。

「アタシ一人でどうすれば・・・って、何？あのお爺ちゃん・・・」

美穂の視線の先には杖について歩く老人がいた。

「って！？あれ杖じゃなくて棍じゃない！？何か腹立つなーアタシの武器がお爺ちゃんの杖・・・」

美穂は一人呟きながら老人のもとに近づく。

「ねえ、お爺ちゃん？何で棍ついて歩いてるの？杖無くしちゃった？」

しかし老人は耳が遠いのか無視しているのか変わらぬ様子で歩いている。今にも倒れそうだが。

「アタシを無視するとはいい度胸じゃない・・・目覚まさしてあげる！饗饌流奥義 地碎衝！」

老人より高い位置に立っていた美穂が老人の目の前に向かって跳躍し地砕衝を放つ。

「おや・・・饗饌の地砕衝かい。珍しいの〜」

「地砕衝を知ってる！？どうして・・・！」

そう思ったのもつかの間、老人は地面についていた棍を下が上になるよう振り上げ美穂の棍の先端にぶつけようとした。

「思ったよりキレはいいけど・・・そんなに弾けると思わないでよっ！」

お互いの棍が衝突した瞬間片方の棍が大きく弾かれた。美穂が振りかざした棍である。

「そんな・・・アタシの技が弾かれた・・・よく見るとあの棍・・・両端に鉄が付いてる、あんな重いものを・・・」

美穂の棍は文字通り木で出来ていて軽く扱いやすいが当たり負けしやすい。そのため地砕衝は先に棍を回転させることで遠心力を増し振り下ろす際の威力を上げる。

しかし老人の棍は鉄が付いていることで当たりの弱さを克服していた。

「貴方・・・何者？」

「僕は饗饌を継いだもの・・・今は息子に任せておったがの・・・」

「じゃあ・・・師匠の知り合いなの!？」

「師匠・・・?恐らくそいつは僕の息子じゃ!まあ僕から見たらまだまだひよつ子だがの!」

「あの・・・アタシの棍にも鉄を付けてください、そして貴方の技を教えてください、強くなりたいんです!」

「この老耄にもまだ力になれるか・・・よかろう、付いて来い娘よ。饗饌をお前に授けようぞ」

二度師を得た美穂。朶、龍騎の力になるための修行はここから始まる――



第参拾話 強さを求めて（美穂編）（後書き）

別にこれ修行でも何でもありませんよね。プロローグですね。

久しぶりなんで饗饌覚えてるでしょうか。「きょうせん」ですよ。

僕も読み返すまで忘れてました。ややこしい名前つけやがって・・・

この間思いついたんですけど龍騎君に妹を登場させてあげます。

実のじゃなくて戦いの中で拾った感じの、俗に言う義妹ですね。

今まで一言も書かなかったから？な感じになるかもしれませんが頑張ります。場合によっては前の話を修正します・・・

これからもよろしくお願いします！

龍騎、妹と。（前書き）

更新の間隔が若干空いてしまいました。申し訳ないです。

宣言通り妹登場・・・果たして今回こそ可愛いヒロインとなれるのか・・・

龍騎、妹と。

菜、美穂がそれぞれの地で修行を積んでいた頃、龍騎も修行をしていたのだが――

「兄様、久しぶり……」

「桃花<sup>とつか</sup>、離れて……」

妹の大神桃花に利き腕の左腕に抱きつかれていた。

桃花は黒くて短い髪が小さな身長と相まってよく似合う。前に会った時より少し大きくなっただが変化はそれぐらいだ。

桃花は龍騎・煌輝の本当の妹ではなく、ある戦場で二人の父が拾った孤児である。

桃花を拾った時に煌輝は神鳴流の修行に当たっていたため世話は龍騎が主になっていた。

結果桃花は龍騎に良く懐くようになったが龍騎も神鳴流の修行を開始し、今日久しぶりに桃花と再開したのである。

「それにしても、何で俺が帰ったときはいなかったんだ？」

「それは……私も、神鳴流の修行をしていたから……」

「桃花も神鳴流を！？父さん、桃花に刀は振れるのか？」

「心配するな、龍騎そりやいくら先祖の産んだ神鳴流が凄くても流石に女に男の全力は防げない。だから別なのを教えてやったんだ、なかなか筋がいいんだぞ？」

「別なのってなんだよ、他に流派なんかないだろ……」

龍騎の父への問に腕につかまったままの沙耶が答えた。

「神鳴流は神鳴流でも……神鳴居合流を……」

「居合！？桃花が？」

居合とは刀を鞘に納めた状態が基本姿勢という特殊な剣術である。龍騎のように戦闘に入った瞬間刀を抜くのではなく、敵が間合いに入った場合、もしくは斬りかかってきた瞬間に刀を抜き捌いて反撃して敵を斬るというまさに一撃必殺の剣技である。

「私……結構上手いって言われてるんだよ？」

桃花が首を傾げながら言う。あんなに小さかった沙耶が居合術なんて龍騎にはにはわかには信じられない。

「じゃあ、桃花。今から俺と木刀で勝負しよう。沙耶の力を見極める。」

「分かった。兄様に私の居合、本気で使うね。」

その瞬間、可愛い妹は一人の剣士の顔を見せた。

その後、道場にやってきた二人は、木刀を持ちお互いに距離をとっ

て構える。

勿論、龍騎は木刀を抜き、桃花は未だ木刀を鞘に収めている。

「それじゃ、初め！」

父の合図と共にお互いに緊張感を増す。

（当然、俺から仕掛けることになるけど・・・下手に行ったら危ないな。）

居合はほぼ確実に相手が来てからの攻撃となる。当然隙を見せれば攻撃の間に斬られてしまうだろう。

（でも、行くしか無い・・・！）

龍騎は右足を強く踏み込み一気に桃花に接近した。そして縦に構えていた刀を水平に構え直す。

「神鳴流奥義 弐の型 翠蓮<sup>すいれん</sup>！」

一度目の前で刀を横に振り、そこから刀を反転させ再度横に斬りながら相手の腹の前で突きへと変化する複雑な技である翠蓮。まずはこれで桃花の実力を見ようとした。

「っ・・・！」

桃花は体を半歩ほど後ろに下がって一振り目を躲した。さらに再度横から斬ろうとする刀に――

「居合 後の先」いあゑ しのせん

右手で高速で抜かれた刀は龍騎の刀を弾き、そのままの勢いで龍騎の首の横を通り過ぎる。

そして剣先が下を向いている状態から剣先を上にし、首筋に斬りかかる。

「くっ！」

龍騎は両足で後ろに跳躍し何とか回避した。

（桃花・・・想像以上に強い。居合だけなら俺より強いかな・・・）

一応龍騎も居合の鍛錬を積んだが、桃花のように極めるような修行をしてこなかった。

桃花は龍騎が後ろに下がったのを見て一度刀を鞘に収める。

（次は私が見せる番だよ、兄様・・・）

瞬間。桃花は溜めを見せない見事な動きで龍騎に迫る。そして龍騎の反応が遅れたのを見逃さなかった。

「居合 先の先」いあゑ せんのせん

今度は返しではなく先に刀を抜いた。鋭く抜かれた刀は龍騎の脇腹を切り裂く勢いで伸びてくる。

（速い・・・）

何とか刀を当てて桃花の斬撃を受け止めたがそれで桃花の攻撃は終わりではなかった。

龍騎が放った翠蓮のように剣先を今狙ったのとは逆の脇腹に向け構え直し、瞬時に刀を振った。

「くそっ！」

「今のを避けた！？」

龍騎は片足を軸に回転し、刀との距離を計りながら後ろに飛び紙一重で躲す。さらに刀に己の刀をぶつけ、桃花の追撃を阻止する。

龍騎が二度構えなおしたときにはすでに桃花は刀を鞘に収め、次の動きに備えていた。

今度は龍騎が踏み込み前に出る。次こそ攻めきると思いつながら。

「神鳴流奥義 御の型 猛雷槌！」  
たけいかずち

上段斬りから刀を持っている両手を持ち替え、剣の軌道を変える技で、急な変化により防御は困難な技である。

「居合 後の後」  
うしあひ

猛雷槌で生まれる最初の虚の振りに対して居合を放つ、桃花。刀を弾かれたくない龍騎はその時点で腕を持ち替え剣の軌道を変える。それこそ桃花の目的だった。

刀の軌道が急激に変わってもこの場合、変わる瞬間を自分で強引に決めさせたために刀の動きが読みやすい。

龍騎は猛雷槌も防がれ、また後ろに下がることとなった。

（単に居合が上手いだけじゃない、受けが柔らかいから攻めづらい・  
・・）

桃花の受けは力で相手の攻撃を止めるより、技術で相手の攻撃の向きを逸らしたり、威力を分散させることに特化していた。これにより刀は傷を受けにくく、相手の隙を生みやすい。

（ちょっと、禁止手だけど・・・使つか・・・）

ここで龍騎も刀を鞘に納め、重心を低くし居合の構えを見せる。桃花も同じ構えだ。

「神明流 秘奥義 神鳴」

（只の居合の動き、これならー）

「そんな、刀が・・・」

桃花の刀は弾かれていた。神鳴流の奥義を二つ防いだ桃花でも秘奥義の神鳴は防げなかった。

「勝者、龍騎。お前ーあれに頼りすぎだぞ？」

「分かってる、でもこうするしかなかった」



「桃花、神鳴は変幻自在、簡単には防げないよ」

「兄様・・・やっぱり強い・・・」

桃花は驚きの色を浮かべながらも龍騎の元に近づいた。

「父様・・・私も兄様と行きたい・・・駄目ですか？」

「まあ龍騎しだいだ、どうする？桃花も連れて行くか？」

桃花の突然の提案に驚きつつも龍騎は落ち着いていて、

「桃花が来たいならいいよ、但し覚悟はしておいてね」

「はい、兄様。ありがとうございます！」

桃花は満面の笑みを浮かべて龍騎に近づいた。

「それじゃ、今日は久しぶりに・・・一緒に寝ましよう？」

「桃花、それ本気で言ってるのか・・・」

龍騎、栞、美穂、そして桃花。四人が集う日は近づいてゆく――

龍騎、妹と。（後書き）

はい、どうでしたでしょうか。桃花さん。実は最初沙耶という名前だったのですが、書いていて沙耶が鞘から刀を抜いて・・・みたいになってしまい駄洒落みたいになったので途中で名前変えました。

何だか最近龍騎君弱くなってる気がする・・・まあお父さんは超強いし桃花は一応神鳴流の方だから技の動きは分かっているからでしょう・・・ちなみに未だもったいぶって動きを書いていない神鳴はその内動きが詳しく書きます。考えましたけど・・・凄く下らない技です。これが秘奥義でいいんでしょうか・・・って感じの技です。

これからも応援よろしくお願いします・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7770/>

---

武神伝

2012年1月13日22時58分発行